
短編集　～一息～

つるめぐみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編集　　（一息）

【Nコード】

N8627N

【作者名】

つるめぐみ

【あらすじ】

一話完結、一話の読了時間は二分程度（毎分五百文字換算）、全てオチありの作品集です。一息ほしいという時間に気軽に越してください。【時々、気まぐれ個人企画を開催しています】

理由

ある陸地から数十キロ離れた海上に、鳥の樂園と呼ばれる無人島がありました。

島の住民はペンギンとカモメだけで、彼らの天敵は一切いません。しかし、平和な環境のために住民は増え続け、島は過密状態になっていました。

ある日、環境に耐えられなくなったカモメ達は島を出ることにしました。皆が次々と飛び立って新天地を目指します。

そんな中、途中で飛び立つのをやめたカモメの一羽が、ペンギンの前に舞い降りて質問しました。

「なあ、ペンギン君。君は空を飛んで、島を離れる気はないのかい？」

ペンギンは首を上げると答えました。

「ないよ。だってここには猛獣がいないし、魚だっていっぱい捕れるだろう」

カモメは、更に質問しました。

「じゃあ、猛獣が出てきて、魚が取れなくなったらどうするんだい？」

ペンギンは「そうだねえ」と答えると続けました。

「島の真ん中に湖があるから、引越するよ。そこにも魚はいるし、水に浮いていれば、猛獣だって襲ってこないしね」

カモメは、更に更に質問をしました。

「じゃあじゃあ、島全体が火事になったらどうするんだい？」

ペンギンは「それは困ったねえ」としばらく悩むと、「そうだと羽をばたつかせました。」

「土の中に潜って火事をやり過ぎすよ。木が全部燃えたら、住む場所も増えるしね……」

カモメはペンギンの強情さに呆れると、大きな息をついて彼を見

ました。

「せっかく立派な羽根があるのに、君は何があっても飛ぼうとは思わないんだね」

ペンギンは真剣な表情に変わると、カモメの最後の質問に、こう答えました。

「だって仕方ないだろう。僕達、一族全員……高所恐怖症なんだ」

告白

街角を歩く女性に視点を絞った男は、駆け足で彼女に近付くと、深く頭を下げてから口を開いた。

「一目見た時から好きでした！　お願いします。僕と付き合ってください」

告白された女性は一瞬、驚いた表情を見せたが、すぐに白い歯を見せて笑った。

「え、嘘！　こんな私でもいいの……？」

女性の問いかけに、男は迷わず首を縦に振ると、用意していた一枚の紙を差し出した。

明日、午後七時に隣の駅前で落ち合い、食事に行きましようと言ったものだ。

食事に行く場所は夜景が綺麗に見え、『カップルに最適、雰囲気も良くなり、最高の夜を迎えること間違いなし！』と雑誌でも紹介されるほどの、展望レストランであった。

その日、言葉少なく女性と別れた男は、自宅に戻ると興奮状態のまま寝た。

翌日の夜にはスーツにネクタイ姿――鏡の中の自分は、知的な男性にしか見えない。

予定通り、七時十分前には待ち合わせの場所に到着した。

ところが、約束の時間になっても女性は現れない。聞いた携帯電話の番号に掛けても、マナーモードのままで出ない。

――まだ電車に乗っているのか？　もしかしたら、嫌われたのかかもしれない。

男はそう思いながらも、今度は彼女の自宅に電話をかけた。

すると、意外にも電話のコール数回で、「はい」という女性の返事が上がった。彼女の声だった。

「なんだ。自宅にいたのか。もしかして約束忘れてた？」

男の問い掛けに、彼女は受話器の向こうで「え？」と声を上げた。
「約束？ 何のこと？」

「とぼけないでくれよ……昨日、君に告白したろう。君はオーケーしてくれて。今日、食事をする約束だったじゃないか」

男の言葉を聞いた彼女は、唸るような声を上げながら聞き返した。
「告白されてオーケーしたのって……もしかして私の双子じゃあ」

男は「えっ」と声を上げた。彼女が双子とは知らなかったのだ。そう、双子だから声が似ているのは当たり前である。気まずい雰囲気になったと、男は感じて慌てて弁解した。

「ご免、双子とは知らなかったんだ。ということは、僕が告白したのは君のお姉さんか、妹さんか……一目惚れだったから、詳しいことも聞かないでいたよ」

そんな男の弁解に、受話器の向こうの女性も気まずそうに告げた。
「違うわ。私達、二卵性双生児なの。あなたが告白したのって、多分……弟よ」

平成隣合戦

閑静な街の市民住宅の住人、五〇一号室の夫婦と五〇二号室の夫婦は同時刻に戻ってくると、挨拶もなく、互いに見つめ合ったまま、身動きをとれないでいた。

五〇一号室の夫婦は、五〇二号室の夫婦のお尻に目を向けたまま釘づけ――

五〇二号室の夫婦は、五〇一号室の夫婦の頭に目を向けたまま釘づけ――

硬直時間は三分間程だっただろうか。両室の夫婦は同時に扉を開けて部屋に入った。

五〇一号室の夫は部屋に入るなり、腰をおろすと、声を上げて笑った。

「おい、見たか今の尾！ 五〇二号室の夫婦！ 驚いたな、あれはタヌキだぜ。あれでも、あいつら、人間世界に入り込んでいるつもりかよ」

五〇一号室の妻は、未だ笑うのをやめない夫を諭すように言った。「やめなさいよ。私達だって、キツネじゃない。お互い、干渉しない方がいいわ。だって、私達キツネとタヌキは相容れない者同士でしょ？」

――同時刻、壁を隔てた隣――

五〇二号室の夫は部屋に入るなり、腰をおろすと、声を上げて笑った。

「おい、見たか今の耳！ 五〇一号室の夫婦！ 驚いたな、あれはキツネだぜ。あれでも、あいつら、人間世界に入り込んでいるつもりかよ」

五〇二号室の妻は、未だ笑うのをやめない夫を諭すように言った。「やめなさいよ。私達だって、タヌキじゃない。お互い干渉しない方がいいわ。だって、私達タヌキとキツネは相容れない者同士でし

よ？」

一息でそう言い切ったタヌキの妻は、平成の人間関係という本を開いて、更に続けた。

「それに、隣人に干渉しない。隣人の家族構成を知らない。隣人に挨拶をしない。だけど腹が立った時は異常なほどに隣人に干渉するのが、今の人間の常識みたいよ……だから、そうやって、人間社会に入り込んでいかないとね……」

勘違い1

休日、会社員の男は上司に誘われて、釣り堀に来ていた。糸を垂らして一時間、魚が食いつくような手ごたえはない。

「釣れないよな……」

ぼつりとつぶやいた上司の声で、男は我に返った。携帯のメールに夢中で、今までの話を聞いていなかったのだ。

「そうですね。誘ってもらったのに……」

男は竿を引いた。餌は食われてしまっている。釣果ちようかがなければ気分も沈む。

「泣きたくなってきましたよね……」

男の言葉を聞いて上司も竿を上げた。何も付いていない。彼も餌を食われていた。

「そうだよ。誘ったのになあ……釣れないから泣けてくる。それとも、あっちの方がいいのかな。そうでもなきゃ、釣れないわけがないだろう！」

上司は興奮しながら立ち上がった。今にも堀に落ちそうな剣幕なので男は慌てて彼を抑えた。

「落ち着いてくださいよ。すぐに、こっちにも来ますって！ そうだ、いい餌与えればいいんですよ！」

堀を隔てた向こうでは、中年男性が大物を釣り上げている。手元にある餌が、明らかに違うのがわかった。こっちは練り餌に対して、向こうは生餌を使っている。

「そう。いい餌を見せれば、どんな奴にもパクリと食いつくわけですよ。簡単ですよ！ 僕も手伝いますから」

諭した瞬間、男は上司に襟首を捕まえて持ち上げられた。殺されるんじゃないかと思うくらいの激しい力だ。上司の豹変ぶりに、男は慌てて腕をばたつかせて声を上げた。

「苦しい！ 落ち着いてください。僕が何したって言うんですか！

？」

暴れる男の襟首を離した上司は、必死に理由を問う彼を睨み付けながら答えた。

「当り前だろう！ 俺は彼女に、違う男が出来たかもしれない。デートに誘ったのに、最近『つれない』と相談したのに、お前はプレゼントさえ与えれば、食いついてくる軽率な女だと言って、彼女を笑ったんだからな！」

上司の言葉に男は愕然とし、相談の内容自体を聞いていなかったと、言い訳も出来なかった。

居候

男は一週間前に知り合ったばかりの居候いそうろうと食事を始めると、料理を乗せた皿を前に、もたついている彼を見ながら、深い吐息をついた。

「……お前と会った時には、凄く興奮したんだけどな」

言った男は、居候が転がしたグリーンピースを拾うと、ごみ箱に投げ捨てる。

見事にゴミ箱に入ったグリーンピースを見て、居候は興奮したように激しく拍手した。

「別に、感動することでもないだろう。むしろ俺は、お前が見せてくれた発明品の数々に感動したよ」

そう……男が居候を快く受け入れたのには、彼が持つ発明品に魅力を感じたからだだった。

自分を完璧に防御してくれるバリアを張る機械、動物の言葉がわかる翻訳機、自分がどんな病気になるか知らせてくれる予告診断機――

出会った時に見せてくれたのは、現代では考えきれない高度な品物ばかりだったのだ。

居候は、品物を手にして喜んでいた男に向かって、「もっと見せてあげるから、僕を君の家に住ませてもらえないか」という条件を突きつけてきた。

そして、こんなに素晴らしい物を、沢山見せてくれるのなら喜んでと、男は快く了解したのだ。

ところが、一週間もたてば居候の欠点が見え始めてきた。とにかく、何も出来ない。靴も一人ではけなければ、服を脱ぐことすらも無理。

簡単に言うなら、赤ん坊と同等の手がかかるのに、大人の体で言葉だけが話せる二足歩行の人間――でしかなかった。

「出て行ってくれと言っても、そうはいかないんだろうな。だってお前の帰る手段は、なくなってしまったんだろう？」

居候は首を縦に動かした。遠い眼をしながら、庭にあるポンコツの山を見る。

「ああ、タイムマシンは壊れてしまったからね。仲間が来るまでは帰れないわけさ」

「そうだな。お前が未来から来たと聞いて初めは信じなかったが、俺は発明品を見て、嘘じゃないと確信したんだ。だけど、何も出来ないなんて話が違うぞ！」

言って男は、食事をスプーンの上に乗せると、居候が開けた口の中に入れてやる。

満足そうに食事を飲み込んだ居候は言った。

「だって未来では、起きるところから下の世話まで、みんなロボットがやってくれるんだ。仕事も家事もロボットがみんなやってくれる。僕達人間は彼らを管理しながら、趣味だけを楽しんで、動く必要もないわけさ」

動くことも出来ないほど太った体の居候が、得意そうに言う姿を見ながら男は言った。

「じゃあ聞くよ。それって、進化っていうのかい？ それとも退化っていうのかい？」

美しい女

女は逃げていた。

得体の知れない者の影と、徐々に近づきつつある不気味な足音から――

誰かに追われている――そう女が感じ始めたのは三か月程前からだった。

会社に着けば一日中パソコンの前で事務作業、仕事が終わると数駅先の自宅まで電車で帰る。

その最寄りの駅を降りてから家に着く、直前の通路でそいつは確かに追ってくるのだ。

慌てて自宅に逃げ込んで窓から外の様子を窺っても、敵も手慣れたもので、既に逃げてしまっている。

恐怖を感じて何度か警察にも相談したが、「被害が出ないことには手の出しようがない。一応、変質者が辺りにいるかパトロールはしますがね」という答えだけで終わってしまった。

自分は美しく、魅力的な女性であると女は自覚していた。仕事場でもその輝きがあふれているのか、男達は必ず一步後ろに下がっている。

――あの女と付き合いたいが、それは注目的になるだけではなく、他の男達の嫉妬の圧力を受けることにもなるだろう。

仕事場の男達が自分を見る視線には、そんな心境が滲み出ている。女は確信していた。

だから追いかけてくる者は頑張って声を掛けても、思いは実らないと感じて、毎夜、同じ道で待ち構えて家まで追ってくるのだと――女は今日も大きな吐息をつく。鏡と向き合って化粧を落とす。素颜も化粧した顔に負けず劣らず奇麗だ。

部屋の外で、弟が「化粧物が化粧しても大して変わらない」と言っている。女には関係ない。

——そう、彼女は自称、世界一美しい女。

得体の知れない者の影と、徐々に近づきつつある不気味な足音が、街頭で照らされる自分の影と、建物で反響する自分の足音とは、全く気付いていない。

ついでに仕事場の男達の視線が、女性の意味不明な言動に困惑したものだということも気付いてはいない……

人間社会

——とある家のキッチンで、一つの小さき会議が行われようとしていた。

「では、本日の議長。イヌくん！」

鳥かごの中にいるインコの指名を受けて、イヌが前に進み出る。

「では会議を始めよう。ネコくん、金魚さんも……よろしいかな」

全員が緊張した様子で、首を縦に振って答える。イヌは確認すると会議を始めた。

「それでは本日の議題について。議題提出者は金魚さんとインコくんだ。ネコくんの行動が横暴すぎる。僕等を引っかき回さないでほしい！ うむ、確かにこれは深刻な問題だ。では、どちらの言い分が正しいか多数決をとろう。ネコくんが正しいと思う者は手を上げたまえ！」

手を上げたのはネコ一匹だけ。彼の行動が間違っている方に他の全員が手を上げた。

「では次！ ネコくんが発情期に騒ぐのは迷惑だ。少し静かにしろ。うむ、では多数決を……」

イヌが他の全員に挙手を求めようとした時が、ネコの我慢の限界だった。

「待てよ、さっきから俺のことばかり！ 俺をのけものにする気か！？ いいよ、そのつもりなら！ 俺を受け入れてくれる家ならある！ そこに入れればいいだけだからな！」

それだけ吐き捨てると、ネコは家を出て行ってしまった。我が儘ばかりだった一員が外に出たのを見て、議長の犬が吐息をつく。

「……よし、うまくいったな。人間がやる多数決とやらで閃いて、実行に移したのが功を奏した。うちを乱す荒れくれ者がいなくなっ
て清々したよ」

インコも金魚も喜んだ。これでネコの機嫌を見て生活する必要は

なくなつたのだ。

——と、そこで動きを止めたイヌは、ふと思いついてインコと金魚に聞いた。

「そういえば、あいつ……自分を受け入れてくれる家があるって言っていたよな……これは人間の世界でいうと、離党した議員が新党を結成するってことでいいのかい？」

メイドロボット

そこに光があるというのなら、天井から吊るされたオレンジ色の電球だけ……

ある一人の科学者が自宅の地下室で、人類史上初となる発明品を完成させた。

「出来たぞ！ これこそが人工知能を持ち、最高の容姿体型を持つメイドロボットだ！」

皮膚も人間のものと違いが分からない人工シリコン、顔の動きも人間の女性と相違ない。

「さて、では次の設定だ。行動優先順位を決めなくてはな」

科学者は小さな機械を取り出した。ロボットに組み込む命令設定機だ。ロボット三原則が有名だが、更に細かい設定もしなくてはならない。

「まずこれだな。主の命令は絶対、第三者の命令を聞いてはならない」

あいつを殺せと自分に指を差されて、第三者の手で殺されたのではかなわない。

「いや、待てよ……私が痴呆ちほうになったらどうする。命令が出来んじゃないか」

科学者は『身の回りの世話をする』という項目を加えて、優先順の一番にした。

「いや、待てよ……身の回りの世話の最中に充電が切れたらどうする。こんな重い物持ち運べんぞ」

メイドロボの重量は二百キロある。科学者は『充電が切れる前に自分自身で、電力を補うこと』という項目を更に一番上の優先順にした。

——これで完璧だ。そう安心した科学者だったが、また一つの不安要素が浮かんだ。

「いや、この命令設定機を誰かに操作されたら意味がない。一番深部に入れなくてはな」

かくして、科学者は全ての作業を終えると、メイドロボを充電して起動させた。

「おはようございます。ご主人様……」

起動した瞬間のメイドロボの動きは、科学者が求めていたものに違いなかった。

全ては順調——しかし、慎重すぎる頭脳が過ちを招いた。

「ご主人様。トイレットペーパーをお持ちしました。お尻をお拭き致します」

科学者が「遠慮するよ」といってもメイドロボはやめない。優先順位が『身の回りの世話をする』方が上だからだ。更に充電が消えるのを待とうとしても、優先順位通りにメイドロボは行動するので永久に動く。

なら、命令設定機を取り外そうと思ってでも深部だ。場所は充電装置の奥——はずす前に、異常を感じたメイドロボは立ち上がって科学者を振り払い、充電を始めてしまう。

「これは落ち度だ……そう、天才すぎるからこそそのミスだ！」

どんなに叫んでも状況は変わらない。爆弾攻撃を受けても壊れないように設計したので、どうしようもない。そして、今日もメイドロボは尻を拭きに来るのだ……

本物

ある病院の病室に、回復見込みなしの重病とされる一人の少女がいた。

そしてその少女は、オー・ヘンリーの小説にある最後の一葉と同じように、窓の外に見える一枚の蔦つたの葉を見ながら、あれが散った時が自分の最後の時なのだと信じ込んでいた。

「あれが散ったら終わりなんて、馬鹿な事を考えちゃいけないよ……」

医者や家族が何を言っても、少女は聞かなかった。風の日も雨の日も葉を見続けた。

しかし、少女がいくら待っても葉は落ちなかった。

季節は巡りに巡って冬を越し、春になる。優しい光にあふれた春の日の朝、少女は居ても立ってもいられずに、小説の内容を思い出して窓を開けた。

オー・ヘンリーの小説、最後の一葉——年老いた画家が悲観した少女のために、本物のような葉の絵を雨風の日に描いて、彼女の生きる気持ちのために、治る見込みのない肺炎にかかってしまう悲しい話を思い出して——

あの話のように誰かが絵を描いたのではないかと思ったのだ。ところが葉は絵などではなく、確かに風に揺れている。

それを見た少女は、風雨に負けない蔦の葉に勇気付けられると、奇跡的な回復を果たして数か月後には退院していった。

少女の退院を医者や看護師全員で祝って送り出す。もう二度と彼女は病室に戻ってこないだろう。全員が安堵した。

そして、家族に連れられて少女が消えたのを見計らったように、一人の男が姿を見せた。手には何本かの配線を持っている。

「どうでしたか？ わが社の商品は……今なら、風雨にも乱れず、肉眼でも本物に見え、縁ふちさえもない、外付けスリーディーテレビが

十万円代でお買い得です！」

営業常套句で宣伝する電気店の男の前に、病院関係者は答えた。

「そうだな。ここまでの性能とは思わなかったよ。うちのも新しいのに買い替えるか……何よりも人を元気付けられるものなら、いくらでも買い入れるよ」

多数決

狭い空間で一つの会議が始まった。会議の中心にいた議長がまず声を上げる。

「集まった人数は四人か……あと一人はどうした？ 欠席か？」

「気分が悪いと……四人で決めてくれと言っていました」

中心にいたものは「うむ」と半ば困ったような返事をする、他のもの達に意見を述べた。

「俺はこっち側の意見に賛成だ。今からはこっちの時代だ。考えを改める気はないぞ!!」

「俺もだ。こっちで遂行するからこそ、生きがいになる！」

中心にいたものに賛成したのは一人。他の二人は断固反対した。

「そっちの意見を通すなんて横暴よ！ 訂正して!!」

「そう、生きがいなんて言い方はおかしい！」

意見は二対二の物別れで終わった。あと一人いたら……中心にいたものは吐息をつく、最終決定を告げた。

「仕方がないな。ではこの案で話を通そう。結果は十か月後に出る」
会議はそのまま終了し、時は流れ、結果の出る十か月後がきた。
会議室のある狭い空間から光あふれる空間に飛び出した時、その案の内容は明らかになる。

「お母さん。頑張りましたね……男の子ですよ！」

分娩室内で看護婦に手渡された我が子を抱いて、母親が近くにいた夫にも見せた。

「可愛いわね……顔は私似かしら？」

「本当だな。きっと美男子に育つぞ」

優しい父母に見守られて赤ん坊は育っていく。体内の会議室で決定した案に従いながら……

二対二の同票。そして赤ん坊の彼は、男とは思えないくらいの高

い
声
で
泣
い
た
。

勘違い2

休憩時間、会社員の男は上司に誘われて昼食をしに来ていた。食事を初めて数十分、食べ終えた上司が箸を置く。

「人気があるんだよね……」

ぽつりとつぶやいた上司の声で、男は我に返った。携帯のメールに夢中で、今までの話を聞いていなかったのだ。

慌ててふと見ると、上司の手の中には週刊誌がある。今、人気急上昇中のアイドルグループが表紙だ。

「そうですね。僕もファンなんです」

今度こそ応対を間違ったら終わりだ。そう感じた男は上司の話に合わせた。

「そうか……奇遇だな。俺も応援しているんだ。だから頑張っほしいよ」

男は今度は失言していないようだと感じると、調子に乗って上司の話に続けた。

「僕は追っかけをやるくらいなんです。だから、絶対に結婚はしてほしくないですね」

一瞬上司は困惑したような表情を見せた。男はまた間違ったのかと思って息を呑む。

「追っかけか……それは凄いな。俺は応援するくらいでそこまでじゃないよ。しかし、結婚している方が逆に人気は上がるって言うよな……」

「えっ!? そうなんですか?」

男は動揺した。上司と少し意見が違うようだ。なので少し話題を変えることにする。

「では、誰が一番好きなんですか?」

上司は考え込んだ。数十秒たってからようやく口を開いた。

「一番好きなのは十六代大統領リンカーンだな。奴隷制に一番先に

抗議した人だもんな。しかし、お前がアメリカ大統領を追っかけるほど好きだとは思わなかったよ。しかし残念だ。彼らにも『任期がある』んだからなあ……」

上司の言葉にまた男は愕然とし、話の内容自体を聞いていなかったと、言い訳すらできなかった。

落し物

深夜の閑静な住宅街——男はいい気分で酔っ払いながら、自宅へと足を向けていた。

酔っているので思考回路は完璧とはいえず、自動販売機にぶつかって、喧嘩を売ってきた若者と勘違いして殴り付けたり、落ちていた空き缶を思いっきり蹴り飛ばしたりする。

男は気分よく、そして態度は悪酔いするタイプだった。

この悪癖が理由で男は離婚していた。そこで反省すべきなのだろうが、それでも酒は断てなかった。

酒で喧嘩は日常茶飯事、記憶も定かではないので相手が誰であろうと構わない。

近所迷惑も考えずに奇声を上げたり、もよおせば何処でも立ち小便する。

派出所に連行されたことも何度かあり、刑事に「またあんたか」と言われる常習犯だった。

ふと、男は揺らぐ視界の中に映る一つの物体を見た。

重い物ではない。静かに吹く風に揺られてひらひらと動いている。

男は落ちている物体に近付くと、何であるか確認した。

それは——女性の下着だった。

若い女性の下着……それも勝負下着なのではと疑う——いや、確信すべきものだった。

男は興奮した。人が居ないか慎重に周囲を見回すと、酔っ払いとは思えないほどの俊敏さで懷の中に忍ばせた。

すると、拾った数メートル先に、もう一つ女性の下着が落ちていた。

今度は人目を気にすることなく、男は下着を鷺掴みにして懷に入れた。誰の目で見ても不審者と取られるほど顔がニヤける。

——これは大収穫だ。喜んだ男は角にもう一枚、下着が落ちてい

るのに気付いた。

もはや抑制は利かず、全速力で目標を捕捉する。

しかし、懐に入れようとした途端、男は突然飛び出してきた二人組に両脇を掴まれた。

「!? 何だ! お前達は!」

喧嘩を買おうと暴れるが、両脇を掴まれているので徒労に終わる。そして、男が更に動きを止める台詞を二人組は叫んだ。

「ようやく捕まえたぞ。下着泥棒め!」

「^{おとり} 囮捜査にまんまと引っ掛かったな。まぬけめ! 不審者の顔丸出しにしゃがって!」

聞いて男は愕然とした。この状態で言い訳など出来るのだろうか

――

言っても無駄だろう。そして今日も「またあんたか」と派出所の刑事に言われるに違いない。

そして、せっかく懐に入れた未使用の下着が、虚しく地面に一枚ずつ落ちた。

転倒

男は鼓膜が激しく揺れ、脳髄に響くほどの大きな女性の声に気付くと目を開けた。

倒れたのだろうか――体中が痛くて顔を顰める。体を起こすと女性を支えてくれた。

「あなた、大丈夫！　いくら呼んでも目を開けてくれないから、死んじゃったと思ったわ！」

男の目の前にいたのは妻だった。

結婚生活五年目、子供は出来ていないが、それなりに幸せな生活をしていた。目の前にいる妻は、大粒の涙を流しながら、

「大丈夫？　大丈夫？」と繰り返している。

直前までの記憶がない男は妻に聞いた。

「俺、どうしたんだ？　倒れたのか？　なんか凄く後頭部が痛いけど、頭を打ったかな」

男が聞くと、妻は目を丸くしてじっと見詰め返した。

「え？　何も覚えてないの？　帰ってきて、夕食しながら……」

「ああ……食事していたのか。いつも君の料理はうまそうだな。倒れた俺を心配してくれたんだね。御免、心配掛けて。感謝しているよ。倒れたのは多分、仕事が忙しかったからだろう。明日は会社を休んで病院に行ってみるよ」

まだ心配そうに見詰める妻を氣遣って、男は食事を口に入れた。頭の痛みは徐々に少なくなってきたようだ。やはり、倒れた時にぶつけただけなのだろう。

食事する男をしばらく見ていた妻は、手を止めると席を立った。

「ぶつけた頭を冷やすためのタオルを濡らしてくるわね」

奥に入っていく妻の背中を見ながら、男は「ありがとう」と言っ
て感謝した。

タオルを取りに奥の部屋に入った妻は、夫の視線が離れたのを確認すると「ホウ」と軽い吐息をついた。

様子を窺うと、夫の鞆から携帯電話を取り出す。

許可もなくメールを開くと、妻は言った。

「驚いたわ。まさか全部忘れているなんて……しかも私に感謝していると言ってくれて。まるで新婚生活時代に戻ったみたい。こうなるのだったら、もっと早くやっておくんだったわ。浮気相手のメールを見付けて倒してしまったのが切っ掛けになるなんて……さてと、今の内に、あの女のメール記録を全て消してしまいましょ……」

能力

休日の朝、男はいつもより早い時間に目が覚めた——いや、というよりも起こされた。

独り者の男には同棲している最高の相棒がいる。それが三歳のオス……愛犬だった。

会社に行く一時間前の時刻になると、愛犬は必ず散歩をせがむ。せがまれると行くしかないので外に出る。三年間、それが習慣になっていた。

しかし、今日は休日だ。男は寝坊すると決めたのだ。

ところが、タヌキ寝入りを決め込んだ男の耳元に來た愛犬が、「おい、散歩行こうぜ！ この時間に出ないと彼女に会えないじゃんかよ！」

突然、流暢な人間語で話し始めた。寝惚けていた男の眠気も一気に吹っ飛んだ。

空耳だろうと思った男は、陽を入れるために窓を開ける。

すると、目の前の電線にいた雀が、

「おい、米粒あったか？」 「いや、もう刈り取られてねーよ」

と、人間語で流暢な雑談をしていた。

男はそこでようやく気付いた。俺は能力に目覚めたんだ——これを利用しない手はない。

煩く話す愛犬の散歩を適当に終わらせた男は、財布とカードを手の外に出た。銀行口座から預金を下ろせるだけ出して手にすると、足早に目的地へと向かう。

数刻後には競馬場のパドックに到着し、馬達の様子を見ていた。

「今日はちよつと自信ないなー」

「興奮してきたぜ！ 速く走らせろ！」

「こんな雑魚達に俺が負ける訳ないぜ！！」

これから周回する馬達の言葉が、全て男には丸分かりだ。

いつもは悩みに悩む勝ち馬予想だが、迷うことなく馬券を手に入
れ出走を待った。

ところが、レースの結果は散々で、全てゴミ屑となってしまった。
「何でだ！ 俺の能力は間違っていないはずだ！ 何で……！」
最後まで言い掛けた男は、そこでようやく気付いた。

所詮分かるのは言葉だ。彼らの本心ではない。テスト前の優等生
が「勉強してない」というのと同じではないか！

後悔しても既に遅い。帰りの電車賃もない素寒貧^{すかんぴん}だ。

男は肩を落として歩き出す。せつかくの能力もこれでは無駄では
ないか……

そして、頭上で「アホー」と鳴く、カラスの鳴き声の翻訳は必要
なかった。

優秀な人材

ある会社には、絶対に間違いを出さず、しかも徹夜仕事を続けられる男がいた。

当然、営業成績も一位で営業部長になる実力も十二分に備えていた。

しかし、会社はいつまでたっても、男を昇格させようとはしなかった。

男も会社にくき使われていても構わない。むしろそれが名誉だと言わんばかりに、営業成績を更に上げ、顧客数を増やしていった。

ある日、久しぶりに様子を見に来た本社の社長が、男の勤務時間を見て驚き、彼に声をかけた。

「君、少し休んだらどうか？ 有休は限度日に達している。それに残業時間も労働基準法違反だ。体を壊したり、最悪の場合、過労死されたら、我が社としても困る」

男は社長の言葉を無視して、仕事に没頭し続けていた。

優しい言葉をかけたというのに聞かぬふりかと、社長は怒りで歯噛みすると、今度は耳元で叫ぶ。

「聞こえているのか！ 休めと言っているんだ！」

社長の剣幕を見た営業部長が、慌てて駆け付けてきた。そして、「やめてください社長！ それが彼の望みなんです。そうさせてやらないと我が社のためになりません！」

社長が驚く意見を叩き付けた。

「馬鹿なことを言うな。死なれたら困ると言っているんだ！ もう彼は十分、働いているだろう。少しくらい休ませてやれ！」

社長は営業部長の胸倉を掴みながら、彼の行いを責めた。

その時だ。ずっと仕事に熱中し続けていた男が、突然席を立つ。これを見た営業部長が、唇を震わせながら「これはやばい」と口

にした。

男はふっと思いつめたように目を閉じると、社長に向かって告げた。

「ありがとうございました」

すると、男の体が透けていったかと思うと、その場から完全に姿がなくなってしまった。

何が起こったのか分からない社長は、ただ大口を開けたまま立ち尽くすしかない。

呆然とする社長に、営業部長がようやく閉ざしていた思いを彼に伝えていた。

「彼、三か月前に自宅で亡くなっていたんです。けど、霊魂になっても、何故かここに仕事に来ていました。生前の営業成績は二位で、いつも一位になりたいと言っていたそうです。彼が望んでいたことですし、止める必要もない。そう思っていたのですが……」

社長は絶句した。給料を払わなくていい、永久に働き続ける、ミスもしない営業成績一位の人材を失ってしまった。

今更、戻ってきてくれと願っても遅い。代わりの人材を雇うか……

しかし、それに釣り合う者は現世には存在しないのだ――

欲望

結婚生活七年目――

男は食事の準備をする妻の背中を見ながら、新婚当時のことを考えていた。

――あの頃の妻は、今とは違ってスタイルも良く、面倒見も良いお嬢さんだった。それが今はどうだろう。面倒見がいいのは変わらないが、体型ときたら……

新婚当時と比べて体重は五割増といったところだろうか。

目を閉じれば蘇る――あの面影は既になく、羞恥心すら崩壊してしまったのではないかと思う言動も目立つ。

ふと、妻の首元に目をやった男は妙な物を発見した。出来物だろうか……何やら白い物が見える。

昨日も妻の背中を見ていたが、そんな物があるとは気付かなかった。

男は妻に近付いて首元を見た。それは、皮膚に食い込んだ栓のように見えた。

「おい、首元にゴミが付いてるぞ」

妻に「あら、取って」という間も与えることなく、言って男は栓を取り去った。

すると、妻の体は空気が抜けた風船のように、徐々に萎んでいく

……

……

一時後、呆然とする男の目の前には、新婚当時の面持ちと体型を保った妻の姿があった。

「うわああああっ！」

あまりのことに男は大声を出す。途端に背中に激痛が走った。

どうやら、ソファアの上で熟睡していたらしい。声を上げた拍子に落ちたようだ。

そして、目の前にいるのは、いつもと変わらない体重五割増の妻

の姿。

「何だよ、夢か……」

男は妻に聞こえない小声でぼやいて目を閉じる。

——もう一度、同じ夢を見られるといいのになあ。いや、今度は顔も女優に！ それと、長い時間だ。夢じゃなく現実であればいいんだが……

そう、人間は欲深い生き物だ。欲求が満たされれば、更に上を望む。その欲望に終わりは無い。

瞬間、男は腹の圧迫で目を覚ました。顔を上げると鬼の形相をした妻がいた。

「いくら休みだからって、ゴロゴロしてんじゃないわよ！ 暇なら風呂掃除くらいして！」

現実と理想の格差は激しい。時間を巻き戻せるだけでも、人生の修正がきくのではないかと思う。

聞かないふりをして、もう一度寝ようとする、妻のプレス攻撃が再び炸裂していた。

怪奇

深夜、乗客の足も途絶えた無人の駅前に、一台のタクシーが停まっていた。

回送の札を立てた車内には、運転手一人だけ――

慣れない道を走ってきたために、迷子になってしまっていた。カーナビもないので、運転手は地図を広げながら、どこにいるのかを調べる。

しかし、現在地を確認した途端、運転手は息を呑んだ。そこが怪奇スポットとして有名な場所だったからだ。

――嫌な時期に来てしまったものだ。

じつとりと肌に吸い付くような湿気と、生温かい空気が混合される夏の夜に、誰が好き好んでこんな所へ来るだろう。

運転手は心霊番組や怪奇特集が苦手で、妻や娘がその手の番組を見始めると、必ずとっていい程、奥の部屋に逃げ込んでいた。

――こんな場所に一分一秒も長くいるのは御免だ。

ハンドルを切って、車を急反転させると、国道に出ようとする。

目の前の信号は赤、通過する車は一台もないが、無視をする訳にはいかない。

立ち並ぶ家々には、まだ明りが付いている窓がある。タクシーという看板を背負っているのだ。違反を見られて会社に報告されたら、信用にかかわる。

その時だ。運転手の耳は、何かがぶつかった音を捉えていた。

跳ね返った小石が当たった音ではない。無機物ではなく、有機物がぶつかった音……

バン……バン……

一定の時間をおいて繰り返される音は、車の背後から側面に、側面から運転席に徐々に近付いてくる。

前方の信号が青になったのにも関わらず、運転手はアクセルを踏

み込めなかった。金縛りにあったように、恐怖で足が竦^{すく}んで動けない。

瞬間、今までで一番大きな音と共に、血塗れの手が運転手の横の窓に叩き付けられた。

そして、顔面蒼白の女が姿を見せた。顔半分が鮮血で染まっている。その女が口を開く。

「乗せて……」

消え入るような声を聞いて運転手は震え上がった。慌ててアクセルを踏み込んだ。崇^{たか}られるとかは考えなかった。乗せて怖い目にあのだけは嫌だという思いしかなかった。

バックミラーで女の姿を確認する。起き上がった女はタクシーを追いかけてきていた。

そして――豪快にこけた。

心拍数が跳ね上がっていた運転手も、これには驚いてタクシーを停めた。窓を開けると、幽霊もどきの女の声が辺り一帯に響き渡る。

「お願い乗せてよお！ 終電に乗り遅れたのよお！ 酔っぱらって転んで、血塗れなのは謝るわぁ！」

ろれつの回っていない女相手に、運転手は涙目になりながら叫んでいた。

「ややこしい真似すんなぁ！ お陰で……ちびっただろおっ！」

不法投棄

男は目的地に向けて小型トラックを走らせていた。トラックの荷台には故障した冷蔵庫がある。男はある目的地に、ある理由をもって向かっていったのだ。

車道の両脇には鬱蒼^{うつそう}とした森だけが延々と続く。人目に付かない場所だからこそ、男はこの場所を選んだ。

借金がかさんで首も回らない状態から、一つの決断に辿り着いたのだ。冷蔵庫を捨てに行こうと――

家電リサイクル法が決定し、家庭用電化製品は有料で引き取られることになった。

引き取り金額は、大きい冷蔵庫になればなるほど高くなる。景気の良い時に買った商品だ。その時の男は、処分金額など考えてもみなかった。

ところが、不景気で事業を失敗し、今では住むべき場所も奪われ掛けている状況だ。

そして、男の中で決断が生み出された。事業を失敗したのは不景気にした政府のせいであり、家電リサイクル法を決めたのも政府。

だったら、破っても構わないんじゃないか、と――

途中で車が停車していたのが見えたが、不法投棄する場所からは少し離れている。

問題ないと判断した男は、車道から続く林道に入ると、荷台にある冷蔵庫を思いっきり押し出して落とした。

冷蔵庫の登録番号は削り取ってある。周到になされた証拠隠滅だ。持ち主が誰なのか、警察も分かるまい――

全ては完璧、完全犯罪は成立した。自宅に戻った男は、引越しの作業を急いだ。家売ればなんとか食い繋いでいけるだろう。男は捨てた冷蔵庫のことなど忘れていた――

翌日、引越し作業に追われる男の家のチャイムが鳴った。不動産業者が来るには早すぎると思いながら男が玄関を開けると、二人の男がいた。

そして、警察手帳を提示してきた。

「昨日、冷蔵庫を捨てましたね？　そして、引越し作業もしておられるようだ」

刑事の言葉を聞いて男は驚いた。冷蔵庫の登録番号は削り取つてある。しかも捨てたのは昨日だ。予想以上に来るのが早すぎる。

嘘を言うべきか、正直に話すか――男は偽証罪が怖くて後者を選んだ。

「確かに捨てました。謝ります。ただ、それは事業が失敗して苦しかっただけで……」

男がそう言った途端、刑事の手が伸びて手錠がかけられた。

「これは一体どういう事ですか！？　たかが、不法投棄でしよう！」意味が分からずに男は動揺した。暴れる男を抱えて、刑事が止めであるパトカーに乗るよう指示を出す。

「しらばっくれるな！　今、自供したろう。強盗殺人死体遺棄の罪で逮捕だ。どこであの女と知り合ったかは後で聞いてやる。しかし残酷な男だ。冷蔵庫の中に放置するとはな」

男は愕然とした。死体のことは知らない。女のこと知らない。そして、もしかしたらと考える。途中で見たあの車の運転手が犯人なのではないか。

その犯人が、自分を犯人に仕立てるために、車のナンバーを覚えて通報したに違いない。しかも冷蔵庫に死体を入れる徹底ぶりだ。完全犯罪を成し遂げたのはどっちか――相手の車体ナンバーを覚えていない今は、どうしようもない。警察に正直に話しても、言い訳にされてしまうのが落ちだ。

今は、優秀な刑事が、犯人を捕まえてくれるその日を望むしかない――

扉

ある会社の廊下に、ハイヒールの音が響き渡っていた。

音の根源である人物の目にはサングラス。髪は紫に染めてあり、服装も上下金色という派手ぶりだ。唇は濃い赤のシャネルで色づけ、ピアスはハートを象ったシルバークセサリーにピンクのダイヤモンド入り。

「さあ！ 今日も張り切っていくわよ！」

掛け声と共に男（？）は、腰を左右に動かしながら、傍（はた）から見たら不気味で器用な前進運動を続けた。

彼女とすれ違う者は誰もが道を譲る。なぜならカマは世界に名も知れた、ファッションリーダーだからだ。

今日、カマは日本一の光沢と柔らかさを併（あ）わせ持つという、最高品質の布地を引き取りに来た。

その布地さえあれば、今度の品評会も優勝間違いなしという自信があったのだ。

事前に布地を取りに行く約束をしていたので、後は目的地に向かうだけだ。

しかし、カマは目的地に到着する手前の扉で足を止めた。

半年前に来た時にはなかった、『立ち入り禁止』という張り紙があったのだ。

カマは半年前を考えた。あの時、この繊維製品会社は飛び抜けた技術などなく、基本だけを守り、ただどこにでもある布地を生産する小さな会社だった。

それが突然、最高品質の布地を生産するようになり、一気に繊維製品業界一位に上り詰めたのだ。

カマの中である結論が浮かんできた。この扉の向こうに謎が解ける世界が広がっているのではない。そうなるに残るのは抑制ではなく、好奇心だけだ。自分はファッションリーダー。

——そう、私に知る権利はあるにきまつてるわ！

自信からくる勘違いが、カマに大きな間違いを起こさせた。豪快に観音開きの扉を両手で開け放す。

瞬間、カマと製造員の目が合った。製造員は体を震わせながら、カマを見詰めている。

カマも目を見開いたまま、雷が落ちたかのように硬直してしまった。

立ち入り禁止の室内にあったのは機織^{はた}り機——そして座っていたのは一羽の鶴だった。

「姿を見られたからには、もうここにはいられません……」
翼を広げた鶴は窓から身を乗り出すと、空へ舞い上がる。

ただ、カマは鶴が碧空^{へきくう}のかなたに消える姿を静かに見送るしかなかった。

我に返ってから、ようやく繋ぎ合わせた文字が口から出た。

「……って、誰に恩返し！？　　というか、見られたくないのなら内鍵くらい掛けなさいよ！」

そんなカマの叫びを聞いて社長が駆けつけてくる。そしてカマの隣で唸るように呟いた。

「彼女、露出狂の気があったから、張り紙しておいたのに……」

心配 【二人称作品】（前書き）

二十話ということで、趣向を変えて二人称とさせていただいております。

そう……この物語の主人公は、あなたです。

【文字数は約千五百です】

心配【二人称作品】

もし、あなたが数週間前から、異常な右耳の痒みに襲かゆわれていた
らどうするだろう。

他人に相談するだろうか？ たかが右耳の痒みと笑われるのが嫌
で黙っているだろうか？

痒みというのは目に見える外傷とは違うから、他人にこの苦しみ
は伝わらないだろう。あなたは黙っているに違いない。

こんな些細な症状で悩むのはやめよう。時間が解決してくれるは
ず――

そう考えたあなただったが、思いを裏切るように症状は変化して
いった。

痒みの症状は日を重ねていくうちに、耳たぶから耳殻じかく、鼓膜内へ
と進行していった。そして最終的に聴覚にまで、異常が発生したの
だ。

慌てたあなたは貴重な時間を割いて、友人から聞いた耳鼻科に向
かった。

患者数が少なく、大した待ち時間もなしに診療してもらえる病院
だったのだ。そこなら、他の目を気にしなくてもいい。

それに、院長は老年で、公務員だったらとうに定年といった年な
のだが、些細な症状でも親身に診てくれると近所では評判だった。

待合室で待つこと十分にして診察室の扉が開き、ようやく看護師
があなたの名前を呼んだ。

診察室に足を踏み入れると、そこにはまだ患者のカルテを纏まとめて
いる院長の姿があった。

回転椅子を動かし、あなたに目を向けた白髪の院長は鉛筆片手に
言う。

「椅子に座ってください……初めての方ですか。今日はどうされま
した？」

おっとりとした語り口調、慈愛に満ちた院長の言葉。

あなたは安堵しながら、伏せていた顔を上げて院長に目を向け、症状を事細かに説明した。

「耳の聞こえが悪いですか。あと痒みと……さっきの患者さんと同じ症状ですな。ここ数週間、その症状の方が、なぜか多くてね」

院長の答えに、あなたは驚いたはずだ。自分と同じ症状の人間が、他にも沢山いるというのだから当然だろう。取り敢えずは、馬鹿にされないだろうと、胸を撫で下ろす。

「耳が痒くなるのは、金持ちになる前触れだなんて、喜ぶ患者さんもしましたがね……」

院長は言って、あなたの診察を始めた。

その後、あなたは触診と聴覚検査を受けたものの、深刻な症状ではないとの診断結果を得た。ストレスの可能性もあると言われた。

最近、頑張りすぎていたあなた——体は正直だ。時に体は小さなサインを出すことがある。

ちょっとした楽しいことがあれば、ストレス解消になるかもしれない。

あなたは安心して病院を出た。痒みを和^{やわ}らげる薬だけが手元にあらる。

すると、あなたの視界に、宝くじを販売する店が入ってきた。小さな看板が見え、そこに『一粒万倍日』と書いてある。

一粒の粉^{もみ}が万倍の稲穂になるという意味を持つ日で、利益を得ようとするには吉日といわれる。宝くじの店にそう説明書きがあった。あなたの手元には診察を受けて残ったお釣りがあった。

フツとあなたの脳裏に、

「金持ちになる前触れだなんて、喜ぶ患者さんもしましたがね……」と、語った院長の顔が浮かぶ。

買える宝くじは数枚だが、あなたの足は自然と売り場に向かう。

こういう時の偶然と閃きが、大いなる運命を繋いでくれると信じ
て——

さて、あなたの物語はここまで——しかし、この判断が世界を救う鍵になったと気付いただろうか？

あなたの右耳から飛び出した小さな影は、空高く舞い上がると、他から集まってきた沢山の影たちと会議を始めていた。

そして、あなたの右耳から飛び出した影は、他の影たちに説明を始めた。

「地球人の生活と感情を研究して数週間、地球人はどうやら善良らしい。私が寄生して出た痒みを悩みという理由で解決してしまった。それに、地球人は悩みを自らの力で振り払う能力も兼ね備えているようだ。凶悪な種族なら全滅させてしまうつもりだったが、どうやら話し合う余地のある生物のようだな」

地球人の観察を終えたリーダーの言葉に安心して、彼らは地球を去っていく。そう、あなたの行動のお陰で地球の平和は守られたのだ。

——しかし、宇宙人が寄生していたあの時に、あなたが黒い感情を持っていたらどうなっていたのだろうか。そして、寄生されていた他の者も黒い感情を持っていたら、どうなっていたのか——

ただ一つ言えるのは、あなただけではなく、全ての人類が幸せを感じる世界なら、きっと地球はいつまでも平和だということだけだ。

王者

人類が知り得ない未開の地に、世界中の動物たちが住むという原始林があった。

毎日恒例となった雑談会で、まず木上にいたカメレオンが発言した。

「俺の好物は……やっぱ昆虫だな。芋虫！ あれは羽根もないし、柔らかいからいい」

カメレオンの話が終わると、隣にいたコアラがのんびりとした口調で続いた。

「僕はユーカリ種しか食べられないから……好き嫌いとか言えないんだよね」

コアラの言葉を聞いた、ジャイアントパンダが果物をかじりながら鼻を鳴らす。

「まじでー？ おいらは竹しか食べられないって勘違いしている奴もいるけど、他の物も食べられるんだよね。けどさ、人間の世界三大珍獣って言い方が気に『食わなかったり』して」

ジャイアントパンダの親父ギャグに、他の動物たちから「うまい！」「ごちそうさま！」という声上がる。

すると、

「俺は……この場にいる全員がうまそうに見える」

動物たちだけでなく、原始林の木々が震えあがる、抑揚のない声が響いた。

皆の視線が向けられた先には、自称百戦錬磨の勇士である雄ライオンがいた。

舌なめずりをしながら陽炎のように動いた彼に、全員が緊張して身構える。

「まあ、構えんなよ……ここで全員食おうって訳じゃないさ。この俺にだって食えないものがある。それが人間だって言いたいんだ。」

人間を食って殺された仲間を見たことがある。奴らを食うのだけは遠慮したいね」

百獣の王ライオンの話が終わると同時に、

「私は人間が好物さ。いや、ここにいる全員もうまそうに見えるね。私たち一族は人間と、ずっと争ってきたんだ。私が本気になれば背後から食らってやるよ」

どこからか、女性の声が響いた。

自信ある発言に、動物たち全員が震えあがって声のした方を見る。しかし、姿がない。

「か……隠れてないで、で……出てこい！」

ライオンも声を震わせながら、尻尾の先を立てて必死の戦闘態勢をとる。

「どこ見てんのさ……とっくにあんたの鼻の上にいるよ」

すると、姿のない声は思いがけない言葉を発して、ライオンを笑った。

ライオンは寄り目になりながら、鼻の頭を凝視する。鼻の上にはたのは蚊だった……

「さあ、恐れるがいいさ！ 今からチクつと食らってやるよ！」

吸うの間違いだろ！ と、ライオンが突っ込んで鼻の頭を叩こうとした途端、物凄い勢いで飛んできた何かが、蚊を攫さらっていった。

飛んできた何かが戻っていった軌道を追って皆が見る。

「……まずっ！」

自称、原始林の王者を食したカメレオンが食事の感想を述べる。

それを見たライオンは「で……好物の話は？」と、吐息をつきながら、王者雑談会を締めていた。

愛のかたち

最新医療機器が導入されている、とある病院の一室でひとつの騒ぎが起きていた。

「だから言ったじゃない！ 私は、この人に半分の遺産をもらうって約束していたのよ！」

ひとりの女性が、病室に響き渡る大声を上げて叫んだ。

すると老父の妻が、女性の声をかき消すように身を乗り出す。

「よく言うわ。お金目当てで転がり込んできた泥棒猫が！ 婚姻届も出してないくせに！」

病室の奥には、危篤状態となった老父が眠っている。その老父の遺産をめぐる、二人は争っていたのだ。

掴み合いの喧嘩になりそうな二人の間に割り込んで、もうひとりの女性がとめた。

「やめてください！ まだ、危篤状態じゃないですか」

二人をとめたのは老父の孫だった。彼女の横には老父にすぎりつきながら泣き叫ぶ、少女の姿がある。

争っていた二人は、互いに老父の妻を名乗っていた。

『半分の遺産をもらう』と豪語した婦人は二十五歳。一年前に老父と親しい間柄となり、金目当てとしか思えない若さと美貌で彼を落としていた。

婦人に『泥棒猫』と叫んだ妻は、年が五十で籍を入れたのは二年前だ。

遺産相続人となる老父の妻と娘たちが死んだ直後から、二人は老父に付き纏い始めたのだ。彼女らに思惑があるのは、誰から見ても明らかだった。

「おじいちゃん、目を覚ましてよ！ 一緒にお山に行こうって言っていたのに！」

大人たちの争いを横に、少女は大声で泣いていた。老父の孫は涙

にくれる我が子を強く抱き締める。

その時だ。扉を開けて黒服の男が姿を現した。全員が動きをとめて入室してきた男を見た。

「失礼します。遺産相続の件で来ました」

あまりの手際の早さに、全員が驚く。

みな反応を無視して、男はカバンから録音機を取り出すと、その音声を再生していた。

『だから言ったじゃない！ 私は、この人に半分の遺産をもらうって約束していたのよ！』

『よく言うわ。お金目当てで転がり込んできた泥棒猫が！ 婚姻届も出してないくせに！』

しかし再生されたのは、老父の遺言となるものではなく、先程の会話だった。

黒服の男はちらりと床にいる老父に目をやると、録音機を彼の枕元に置く。

すると驚くことに、危篤だったはずの老父が起き上がっていた。

「……ありがとうよ。お蔭で遺産の分配が決まったよ」

老父は言いながら、少女の頭を撫でてやる。少女の母も老父の無事を喜んで抱きついた。

弁護士はそんな老父と親子の姿を見ながら、争っていた二人に向かって冷静な口調で告げていた。

「悪く思わないでください。これもビジネスですので……あなたたちは騙されたと感じたでしょうが、お互いさまだと思ってください。そう、愛に勝る、お金などないのですよ」

ある商品

今の時代からみて近未来とされる時の中で、ある商品が人気となっていた。

店に並ぶのは主に女性客で、全員が金に糸目をつけず、札束を入れた封筒片手に訪れる。

だからといって景気が良いというわけではない。むしろ、景気は下がる一方だ。

それでも女性たちが大金を手到店に飛び込んでくるのは、絶対に退けないという意志と、誰よりも一番でいたいという願望が、この店に詰まっているからであった。

「次の方、どうぞ……」

最後尾から並んで、名前を呼ばれるまで待ち時間は三時間弱といったところだろうか。

女性たちの願望が叶う場所は店の一番奥——薬品のおいが漂う、真っ白な部屋の中だった。

一冊の本を手にした若い白衣の男が、入ってきた女性を見る。

「どうぞ、お座りください。緊張なさらずとも平気です。我が商品は十五万人の方が使用している安全性に優れた商品です。現在まで不良はありません。特許も得ています」

白衣の男は女性の前で本を広げると、ページをめくった。商品数は合計二十。

女性は選別を始めると、一つの商品を指差す。

「これがいいわ……代金はいくらになるのかしら。あと、待ち時間は？」

女性はくる前から商品を決めていたようで、選ぶのにかかった時間はわずか数分たらずだった。

「それは一番人気です。使用されている方は約三万人ですね。お客さまだと、料金はこのくらいになります。品薄の商品ですので、待

ち時間は二週間ほどですが、よろしいですか？」

白衣の男が計算機に打ち出した金額を見て、女性は首を縦に振った。

この商品に関しては、料金は現金前払いとなる。女性は札束が入った分厚い封筒を二個、テーブルに置いた。

白衣の男は封筒の中身を確認すると予約表を出す。女性はそれに氏名、住所、電話番号を書いた。

「では、これで契約終了です。商品が到着次第、追って連絡いたします。先に申し上げておきますが、キャンセルはできません。いいですね？」

再度、確認した白衣の男に、女性は真剣な面持ちで「はい」と答える。

領収書を受け取って出て行った女性の背中を見ながら、白衣の男は息をついた。

「なあ、君はどう思う？ また一番人気だよ」

白衣の男の視線の先には、助手の女性看護師の姿がある。彼女は笑いながら答えた。

「ご希望の顔に変えることができます商品のことですか？ 女は美しい顔になりたいものですからね。わかる気もしますよ。けど、私は愛してくれているあなたがいれば、この顔のままでもいいですよ。だって人間、外見よりも個性と信じていますからね」

地中には

——とある地域に区画整理の話があがり、住民の土地が削り取られることになった。

当然、街の景観のためにという役所側と、慣れ親しんだ土地を渡すわけにはいかないと主張する住民との間で争いが始まった。

役所側は「代わりの土地を用意する。削り取った土地は買う予定で、決して住民に損はさせない」という公約片手に説明会を申し出た。

その申し出に答え、ほぼ全員の住民たちが説明会に足を運んだが、過疎地帯であるために集まったのは老人ばかり——

住民代表として役所側に真っ向勝負を挑んだのも、よわい 齢八十になる老父だった。

「わしらはこの土地に慣れ親しんできた。それこそ骨を埋める覚悟でな！ あんたたちの思い通りには絶対にさせん！」

住民代表の老父に同意して、他の者たちも「そうだ」「そうだと次々に続く。

ところが、一か月二か月と経つうちに、一件二件と引っ越していつて、最終的に三年後には、住民代表として争っていた老父だけの家が残っていた。

老父の家だけが残ったとすれば、そこは道路の真ん中に位置する。さすがにこれには老父も恐怖を覚えたのか、移転許可の書類にしぶしぶサインした。

その時から、老父が妙な行動をとり始めた。深夜になるとスコップ片手に庭に出る。

そして、辺りが白み始めるまで延々と土を掘り続けるのだ。

まず、近所の男が呟いた。

「そういえば、あそこの家のばあさん。しばらく見てないよな……」
そんな噂が、想像から疑いへと変わり——ついには老父の家に二

人の刑事が訪れた。

刑事に警察手帳を提示された老父は、「何だ？」と不機嫌そうに聞いた。

「では、率直に質問します。深夜、庭を掘り返しているそうですね？ 何をお探ですか？」

刑事の言葉を聞いた途端、老父は首を横に振りながら「何も隠してない」と告げる。子供の言い訳のようで必死だった。

「では、何か隠しているということだ……」

事件性があると睨んだ刑事たちが、庭の方へと足を向ける。老父は立ちはだかるが、若い刑事二人だ。かなう相手ではない。

現場に足を踏み入れた刑事は、大きく掘られた穴の中にある棺桶のような入れ物を見た。

中身が何か……近所の住民が証言をしているものに違いない。

刑事二人はそう予測をつけると、後ろで「やめてくれ」と叫ぶ老父を無視して、入れ物をこじ開けた。

すると同時に、家の窓が開いたかと思うと、老婆が「やめて！」と悲痛な叫びを上げた。

刑事たちは顔を見合わせた。入れ物の中にいるはずの老婆が、なぜここに――

彼らが入れ物の中に何があるのか聞く前に、老父が涙を流しながら叫んだ。

「お願いじゃあ！　ようやく発見できたタイムカプセル！　わしと婆さん合作の官能小説だけは読まんでくれえ！」

予想外の入れ物の中身を聞いて刑事二人が目を合わせる。

そして、「捨てられるかもしれん……」と号泣する老父とは対照的に、窓から顔を覗かせていた老婆は顔を紅潮させた。

聖夜に 【クリスマス作品】

一年の中で、最も人が無防備になるのは、大きなイベントがある日だろう。

そう考えた男は、大人も子供も恋人たちも高揚するその日を、ずっと待ち望んできた。

今夜はクリスマスイブだ――

正月に長期旅行を予定していて、戸棚に旅費を隠している家も多い。

更に、クリスマスだからと外食に出る家族もいる。そんな幸せに満ちている者たちを横に見ながら、男は激しい嫉妬心を燃え上がらせてきた。

長年の経験から、この日に行動すれば、間違いなく成功すると男は踏んでいたのだ。

男の職業は泥棒だった。

昔から素行が悪かったというわけではない。学歴は自慢できるものではないが、新卒者として会社に雇われた時には、残業も上司との付き合いも喜んで受けてきた。

その上司との付き合いの中で、男は初めて賭け事というものに手を付けた。そして、初めてだというのに、面白いほど儲けてしまったのだ。

以来、必死に仕事をするのが馬鹿馬鹿しくなった。残業を断っては、賭け事の方に足を運んだ。

ところが、今度は勝てない。次は絶対にと何度も思っただけ繰り返すうちに、多額の借金を抱えることとなった。

これからどうやって生きて行こうかと考えた末に、男は人の道を外れてしまった。

そして、皮肉にも初めて盗みを成功した日が、クリスマスイブだったのだ。

今年も同じように行動へと移す。男は盗みに入る家の者たちが全員寝たのを見て侵入した。

まず、奥の部屋に鏡台を見つけた。仏壇の隣にあったので縁起が悪そうな気もしたが、引き出しを開けると空——ではと考えて手を突っ込むと、死角から指輪入れを見つけた。

開けてみると、すぐにダイヤモンドの指輪だとわかった。しかし、男はこれを見捨てて違う物を探した。指輪は換金した時点で足が付く。危ない橋は渡らないというのが男の持論だった。

次に男は隣の部屋を覗いた。子供部屋——子供は大金を持っていないから期待できない。

すぐに部屋を変更する。すると、目の前に小型犬が出現した。小型犬は遊ぼうと言いたげに男にじゃれると、付けていた手袋を銜え取った。

男は動揺した。これでは現場に指紋が残ってしまう。仕方なく盗みを断念して家を出た。

小型犬が吠え続ける声が、男の背中に浴びせられていた。

——翌朝、刑事たちが、その家の現場検証に訪れた。

そして、報告を受けた刑事が首を傾げた。

「連続強盗犯を捕まえたのはいいですが、ここの犯人の動きは理解できないですね」

首を傾げる刑事に、事情聴取をされていた女性が「はい」と返事をした。

「家に泥棒が入ったなんて、刑事さんに聞いて初めて知ったんですよ。なくなったと思っていた結婚指輪が姑しゅうとめの鏡台の上に置いてあって……サンタクロースが見つけてくれたのかなって言っていたんです。それに、犯人が落としていった手袋も赤ですしね」

競争 【2011年正月作品】

ある村に、自分こそが村一番の俊足として自信を持っていたウサギがいた。彼はスピードが全てだと信じて疑わなかった。足が遅い者に存在価値はないと考えていたのだ。

そんなウサギの前に、一匹のカメが姿を見せた。麗らかな日差しの中で一生懸命に歩いているカメを見て、ウサギはからかってやろうと思いついて駆け寄った。

「カメさん。ひとつ俺と駆けっこしてみないかい？」

ウサギから挑戦を受けたカメは驚いた様子を見せると、首を伸ばして鼻を鳴らした。

「いいけど……僕のほうが早いと思うなあ」

競争に関しては最強という自負心を持っていたウサギは、カメの言葉を聞いて怒りで歯噛みした。

「よし、じゃあ競争しようか」

後日――二匹の思いは互いの心の中でぶつかり合いながら、スタート地点に並んだ。

しかし、どちらが一番になるかなど、誰が見ても明らかだろう。ところが、カメを応援にしにきていたカメ一家はウサギを笑った。

「彼は僕たち一族の中で一番早いんだ。悪いけど、あのウサギ……恥かくね」

地獄耳とも言われていたウサギには、カメ一族の中傷がはつきりと聞こえた。

完全にプライドを傷つけられたウサギは、スタートの合図が響くとともに全力疾走する。

突き放したと確信してウサギが振り返ると、カメはスタート地点で何やら準備していた。

達者なのは口だけか。このまま三往復ぐらいの差をつけてやる！――が、その自信とよそ見が彼の計算を狂わせた。目の前にウサ

ギの子供が飛び出してきたのだ。とてもではないが、このスピードでは止まらない。

鈍い激突音が響くと思われたその時、コース上に一陣の風が吹いた。

急ブレーキをかけたウサギは、子供とぶつかっていないことに気づいて顔を上げる。

彼の目の前には、信じがたいことにウサギの子供を抱えて飛んでいるカメの姿があった。

しかも普通ではない。四方から火炎を噴出しつつ、回転しながら飛んでいる。

呆然とするウサギを抜き去ったカメは、ゴール地点に到達すると着陸した。

慌ててウサギはゴール地点に駆け込むが、勝負は見えていた。よく見るとスタート地点にいたはずのカメ一族たちの姿もある。

「言い忘れたけど、僕たちの祖先は北極の氷の中で眠っていた古代の怪獣らしいんだよね。名前は『ガメラ』っていったかなあ」

カメの話を聞いたウサギは目を丸くした。馬鹿にしたカメにそんな秘密があったなんて。

「くそ……見かけに騙された」

ウサギはがっくりと肩を落とすが、カメは彼に向かって笑いながら言った。

「そうかな、僕は勝てたけど、現実では違うんじゃない？ 日本の干支って動物たちの競争順位で決まったみたいだよ」

ウサギの肩をポンと叩いたカメが最後に告げる。

「二〇一一年。兎年！ おめでとう！」

しかし、カメの言葉が終わると同時に、彼に助けられたウサギの子供が目回して倒れた。

欲望と夢

二十二世紀——人類の生活環境は新たな進化を遂げていた。

平均寿命が伸びたのはいうまでもなく、病気というものが存在しなくなり、障害という言葉も世界から消えた。

が、それに共通して人口が急激に増加したために、各国が国民の人口管理を開始した。個人情報保護法を無視した政策は、多くの者たちの反感をかったが、その管理政策に付加するようなかたちで犯罪は激減した。

死の原因とされた病気と殺人が世に存在しなくなると、人はさらに欲を出した。

次に注目が向けられたのは乗り物の見直しだった。死亡交通事故は減少していたものの、ゼロではない。完璧を求めて業界は競い合い、最終的に新型の交通機関を生み出した。

その結果、死亡要因を円グラフで示すと、一位は寿命という驚異の結果がもたらされた。

しかし、命への執着は尽きなかった。寿命を延ばすためにはどうすればいいか——生物学者や医薬品業界、医師業界がこぞって研究を重ねていった。

研究成果はすぐに表れ、平均寿命は数十年前と比較して、二倍という数値を記録した。

ところが、人類は自分たちの生活に執着するあまり、環境対策を疎かにしていたことに気づいた。地球温暖化、土壌汚染、海面上昇——地球は住めない星になりつつあった。

宇宙への逃亡を考えた人類だが、増加した全ての者たちが定住する星と移動手段が存在しない。そのため、世界各国の要人たちが召集されて、緊急会議が開かれた。

結果、要人たちは究極の決断に踏み切った。人類の繁栄を願って

数十メートル先も見えない混濁した空気の中で、一人の男が地面に落ちているモノに気づいて声を上げた。

「まだ旧型があったのか」

仲間の声を聞いたもう一人が、落ちているものを確認して「本当だ」と相槌を打つ。

「回収してもらわないと駄目だな。放置したままだと臭くて仕方ない」

言って男は通話機を手にとると、出た相手に報告した。

「改造していない旧型人類が死んでいるんだ。すぐに回収しに来てくれ」

連絡し終わると、男たちは混濁した空気の中を進んでいく。彼らの口からは、すでに人のものとは違う、機械的な呼吸音が鳴り響く。

「そろそろ栄養注入が必要だな。注入スタンドはこの先にあったっけ」

聞かれた男は「ああ」と返した。手元が目盛りは注入を促す警告を示している。

「そういえば、旧人類が統治していた時代の死亡要因は寿命だったらしいぞ。あの時代の人類は考えてはいなかったろうな。一番の死亡要因が栄養注入忘れになるなんて」

何をしても死なない体に触れながら、男たちは息をつく。

「一生、働き続けなければいけない体か……いつそのこと」

旧人類は予想していたのであるうか。数百年後には人が人ではない体になっているということを――人類の夢であった永遠の命は、今はただの重みでしかない。

相手は

二年前の寒気極まる季節——女性は一生涯忘れられない、悲しい出来事を体験していた。

「俺に一生ついてきてくれないか」そう告白してくれた男性との突然の別れ。予期していなかっただけに女性は家に閉じこもり、回想するたびに号泣した。

不幸が起きた後に幸運が舞いこめば、今後の人生の糧になるのかもしれない。

しかし、女性のもとに神は舞い降りなかった。室内に響いた音が、閉ざしていた心の扉を叩いたのだ。

それは昼時に鳴り響いた電話だった。食事の準備をしていた女性は、慌てて受話器を取る。すると、電話の向こうから妙な息づかいが聞こえた。

「……今、どんな色の下着を付けているんだい」

相手は明らかに変質者だった。非通知回避機能のある電話なら、妙な男の声を聞く必要もなかったのかもしれない。そして、どこで電話番号を知ったのだろうと考えてもきりが無い。その日は聞こえなかったふりをして、電話を切った。

すると数日後——また昼時に電話が鳴った。恐る恐る出てみるとあの声だった。

「一人で寂しいんだろう。相手をしてくれよ……」

女性は電話を切ろうとしたがやめた。向こうは自分の顔を知らないらしい。相手がどうするのか、経過を見届けるのも一興かと考えたのだ。

黙って聞き続けていると、男は卑猥な話を続けた。一方的な語りで性欲を満たすつもりらしい。こんないたずら電話があると女性は聞いてはいたが、まさかこの時勢に自分の家にかかってくるとは思

ってもいなかったので驚いた。

——とはいっても、この話はどこまで行きつくのだろうか。

女性が考えていると男の話がとまった。男も黙り続ける相手に困惑しているらしい。

互いに出方を窺う、奇妙な時間が経過していく。

ついに女性は我慢しきれなくなつて、男に向かって話しかけることにした。

「それから、どうしたんだい？」

女性が声を出した途端、男はわざとらしいくらいの大きなため息を漏らした。

「なんだよ、ばばあか……」

この一言を最後に電話は切れた。相手がなくなったことを教える単調な音だけが響く。

受話器を置いた女性は、手にしていた仏飯器に米を盛ると居間に足を向けた。

「やっぱり切られてしまったね。男の人に言い寄られるなんて久しぶりだから、高揚したのにさ……こんな気持ちになったのは、二年前にあなたと別れて以来だねえ」

女性は仏壇の前に座ると、二年前に他界した夫の位牌を見た。

「いたずら電話の相手なんて顔も知らないわけだからね……きつと向こうは無駄な時間を費やしたと思つたろうさ。けど、私は話し相手ができたようで嬉しかったんだけどねえ」

電話をかけてきた男にも、きつと自分と近い年の母親がいるはずだろう。自分の息子も二年前の葬式で会ったきり音信不通だ。

女性は葉書を取り出すと、白紙の面に筆をはしらせた。

『俺、俺っていう電話があつたけど、あんたあれから元気にしてるかい？』

——きつとこれで驚いて、息子から電話がかかってくるはずだ。一人きりの親を心配しない子供はいないと信じたい。

女性は久しぶりに化粧をすると、葉書を出しに家を出た。

自供

深夜、つば付き帽子で顔を隠した男二人が、閉店したペットショップの前で怪しい動きを見せていた。彼らは周囲を確かめると、車の荷台からボールを取り出した。

今から男たちがやろうとしていることは常識ある行動ではない。窃盗だ。てこの原理を利用して、強引にシャッターをこじ開ける。そして、わずかに口を開けた場所から入店した。店内に防犯カメラはないが、異常を感じ取った動物たちが騒ぎ始める。

――が、男たちの行動は揺るぎない。ケージに入った動物を視認すると、唇を歪めて笑った。

「いたぞ、輸入禁止になっているやつだ。ここも全部盗んじまおう。後ろめたいことがあったら、通報しないはずだからな」

男たちが目をつけていたのは、高額で取引される奇少動物だった。盗まれたのが密輸された奇少動物なら、店主は警察に被害届を出さない。彼らは常習犯で計画も徹底していた。

動物たちをケージごと車に積み込んだ男が、興奮して息を弾ませる。

「やりましたね。これでうまい飯が食える！」

「ああ、これこそ完全犯罪だ！ あとはこいつらを海外に売り飛ばせばいい」

男たちは現場を後にする。

しかし、男たちの計画を裏切るかたちで、店は被害届を出していた。

翌日、動物を一時的に保管するために男たちが用意した疑似ペットショップに、刑事二人がきた。

「この近くのペットショップで動物が盗まれる事件がありました、一応、確認のために来ました」

言った刑事を男たちは快く店内へと招き入れた。男たちは刑事が来ても絶対に捕まらない自信を持っていたのだ。犯行時に身に着けていた服も帽子も全て処分している。希少動物も分らないように着色してごまかしていた。

「ご協力ありがとうございました」

一通り観察した刑事は、動物たちが盗まれたものだ気づかなかった。礼まで言って店を出ようとしていた。その時だ。

『いたぞ、輸入禁止になっているやつだ。ここも全部盗んじまおう。後ろめたいことがあったら、通報しないはずだからな』

店の隅から甲高い声が響いた。声の主は大型のオウムだった。

『ああ、これこそ完全犯罪だ！ あとはこいつらを海外に売り飛ばせばいい』

オウムの流暢な人間語を聞いて、刑事二人が顔を見合わせる。そして、盗まれた動物たちの写真を確認した直後に、男たちに躍りかかった。

捕まった男たちに反撃の余地はない。ただじっとして連行される時を待つしかない。

その男たちを見ながら、大型のオウムが再び口を開けた。

『やりましたね。これでうまい飯が食える！』

あなたが落としたのは 【情景描写のみのコメディ】（前書き）

三十話ということで、『客席視点の情景描写のみのコメディ』に挑戦させていただきました。

セリフ、感情描写はありません。さらに比喻表現や登場人物の視点から生み出される想像描写もありません。

情景描写だけで、目の前にあるものを想像していただく作品となっております。

これから何が起こるのか、何が現れたのか――そして結末は？文字を紡ぎながら、ご堪能ください。

あなたが落としたのは 【情景描写のみのコメディ】

鉄のオノを担いだ男が、山道をゆつくりと歩き続けていた。木々の合間から漏れた光が、時折オノの刃を光らせる。森の住民たちが来客を見て、木の葉を散らせながら飛び去っていく。男は歩みを緩めることなく進んでいった。

すると『危険！ 泉に近づくな』と書かれた看板が男の前に現れた。看板を一瞥した男は道を遮るロープを潜ると、さらに奥へと歩を進める。生い茂る木々の密度が徐々に増していき、木漏れ日も届かない薄暗い空間が構築されていく。

すると、男の進む先——目の前に澄んだ泉が姿を見せた。水面は光を浴びて黄金色に輝いている。男は湖の前に立ててある看板を、目を細めて見た。

看板には『泉の女性が現れます。故意にモノを投げ込まないでください』と乱雑に書かれていた。

文字を見た男は深呼吸した。そして、用意していたオノを目を閉じながら投げ込む。

光り輝く水面に円状の波紋を立てながら、オノは沈んでいく。沈んでいったオノを見つめながら男は手を合わせた。

すると、気泡が湧き上がるとともに光が放たれて、泉からある者が現れた。

男はこれを見て息を呑んだ。目を見開いたまま、腰を抜かしながら後退する。

彼の目の前には、全身緑色の体躯をした両手足に水かきがある生物がいた——頭にある割れた皿には、男が投げ込んだ鉄の斧が突き刺さっている。

陸に上がった緑色の生物は背中の中を甲羅を掻きながら、水に濡れた足跡を一步、二歩と創作していく。

そして、男の眼前で立ち止まると、突き刺さった斧を頭から抜い

て彼を見た。男は顔面蒼白になりながら、首を横に振り続ける。

男が振り続ける首の動きと合わせるように、緑色の生物も首を横に振り続けると、耳の下まで裂けている口を開けた。

男は震えた。涙目になりながら這って逃げていく。その後ろ襟を掴んだ生物は、また首を振ると、泉の前に立ててある看板を指差した。

『泉の女性が現れます。故意にモノを投げ込まないでください』

男は目を見開いた。看板の横には一枚のメモが貼られていた。

『その時は責任をとってください』

緑色の生物に目をやる。緑色の生物は頬を赤らめながら、身をくねらせて近づくと、男の口元に軽く息を吹きかけた。

男の瞳に看板の文字が映る。男は震えた。顔面蒼白になりながら、大量の脂汗を流し出す。

物語『金の斧、銀の斧』の泉の女神を気取った『女カップ』の罨にはまった男は、彼女の接吻を強制的に受けると、顔面蒼白のまま昏倒してしまった。

あなたが落としたのは 【情景描写のみのコメディ】（後書き）

小説「アハ体験」とさせていただきました。

現れたのは、やっぱり『アレ』か大当たり！ と満足していただけ
たら幸いです。

勘違い3（前書き）

この作品は勘違い1・勘違い2の続編になっています。

単独でも楽しめますが、読者さまにはオチを読んでもらう楽しみも提供したいと考えております。

今度はどんな勘違いから誤解が生じるのか……予想しつつお楽しみください。

勘違い3

ため息を含めた呼気が白い。無意識に出た、なま欠伸も言葉になった。

場所は会社の屋上——昼食も済ませて一息つく、そんな長閑な時間のどかが流れていた。

「天気がいいですねえ……」

会社員の男は軽い伸びをしながら、携帯のメールに夢中になっている上司に語りかけた。

排気ガスで霞んだ景色。そびえ立つ摩天楼のお陰で狭い空ではあるが、雲ひとつない青空が広がっている。

ところが、その言葉に上司は驚いた様子を見せた。

「そうか？ そうとは言い切れないだろう。これから雲行きが怪しいって聞いたぞ」

男は首を傾げた。朝に見た天気予報では降水確率はゼロといったはずだが……地域を間違えたのだろうか。毎日のことなので違う日の天気を記憶してきたのかもしれない。

「今はそのようには感じないですけど……」

再度、空を見つめた男に、上司は「いやいや」と手内輪をしながら言った。

「下り坂だって聞いたよ。しばらくは良くないらしい」

男は上司の話を聞きながら、地域を間違えたのだろうと考えた。

それにしても傘を持ってこなかったと後悔したりする。降水確率はどれくらいなのだろうか。男は上司に目を向けた。

「確率はどれくらいなんですか？ 天気が駄目なら、困るんですよね」

「確率？ さあ……百パーセントに近いんじゃないか。でも、お前がそういうことで困っているんなら、俺は一肌脱ぐよ」

男は上司の厚意に感謝した。傘一本でここまで真剣に話を聞いて

くれるとは有り難い。

今まで上司の話を勘違いして失礼を繰り返してきたが、それでも縁を切らずに自分を見守ってくれている彼に男は感謝する。

しかし、その日の天気は崩れることなく、しかも上司は口を閉ざしてしまった。

一肌脱ぐとまで言っておきながら……

男は嘘をつかれたんだと、上司に対しての信頼を失っていった。

その三日後、男は上司に声を掛けられた。

顔には笑みが浮かんでいる。ご機嫌の様子だ。嘘をついたというのに水に流せということなのだろうか。仕方なく男は上司のところに向かった。

「やったな。これを見ろよ！ お前の願いを聞き届けてやれて俺は嬉しいよ。社長にまで頼んで大変だったんだぜ。お前がいなくなるのは寂しいが、俺はこれで役目を果たした」

男は肩を豪快に叩かれながら、上司が指差した壁に張られた紙を見た。重要連絡項という文字の下に何人かの社員の名前が連なっている。

その中に、男の名前も書き込まれていた。上司は愉快そうに笑った。

「いやー『転勤がいい』って言った時には驚いたよ。確かに日本は経済事情も悪くなっているからな。下り坂でも俺は日本がいいと思っていたが、お前の意欲には恐れ入ったよ」

重要連絡項には『発展途上国への技術提供者』と追加されている。

男は上司の言葉に愕然としながら、それはあなたの勘違いですよとは、自分の前科もあるので言えなかった。左遷か栄転か——今は後者であることを願うしかない。

接客

男は開店したばかりのコンビニエンスストアの前に車を停めると、店内の様子を窺った。

時刻は午後十一時。客足も減ってきている。

今日という日のために、男は下調べを行っていた。客足、店員数、立地条件……全て抜かりなくだ。

深呼吸をして、コンソールボックスに忍ばせていたナイフを取り出す。することが決まっていたのだ。強盗である。

開店した当初から、女性店員だけがレジ打ちをしていた。弁当や商品の品出しがある時だけ、店長らしき男が姿を見せる。残りはアルバイト店員二人——彼らが来るのは混雑が予想される出勤時や帰宅時だけだった。

深夜いるのは女性店員のみ。これでは盗みに入れと言っているようなものだ。そう思いつつも、女ひとりに物騒な仕事を押しつけやがって。と、男は感じていた。

——深夜に盗難に遭えば、店長も改めるだろう。女性のためにもなる。

男は顔をマスクで隠すと、ナイフを持って店に入った。

「いらっしゃいませ」

入店するとすぐに、愛想のよい女性店員の声上がる。男は意を決してナイフを突き出した。

「金を出せ！」

男の声が店内に響く。すると、女性店員は慌てる様子もなく、瞬きをしながら軽い会釈をした。

「申し訳ありません。それは出来ません」

「素直に金を出せば、怪我はさせない。出せ！」

「申し訳ありません。それは出来ません」

男と女性店員の押し問答が繰り返される。

さすがに男は尻込みしてしまった。女性店員の視線に迷いがなかったからだ。

深夜、一人でレジをさせられているのに、ここまで雇い主に尽くせるのか――男は退職してきた仕事場を思い出した。

「俺は自己退職したんだ。上司にいびられて。あんたも同じだろう。深夜、女性ひとりに仕事をさせる、薄情な上司に尽くすことはない。金を出せ！」

また女性店員は会釈した。男は自分と女性を重ね合わせてしまった。

「なあ、俺の話を聞いてくれるか？　俺はあんたのことを思ってた。――」

男は自分の苦労話を長々と語った。防犯装置を押す様子がなかったからだ。

しかし、話が終盤になった時、男は入ってきた足音に気づいた。いたのは警官二人。慌てた男は女性店員を人質に取ろうとしたが、間に合わなかった。

警官二人に取り押さえられて、手錠を掛けられる。男は観念するしかなかった。項垂れたまま、警官とともに店を出る。

すると、そんな男に向かって、女性店員が声をかけていた。

「またのご来店をお持ちしております」

聞いて男は目頭を押さえた。警官に向かって頭を下げた。

「申し訳ありません。馬鹿なことをしました。上司に首にされて自暴自棄に……あの女性の仕事ぶりを見て目が覚めました」

男の反省の弁を聞いた警官二人は、「ああ、それは良かった」と笑って相槌を打つ。

そして、コンビニエンスストアの前にこう書かれた看板の前を、パトカーは通り過ぎていた。

『只今、当店では防犯試験中のため、日本初ロボット女性店員を導入しています』

そう、第一の防犯試験は見事なまでに、目的を達成したといって

いいはずだ。

怪我人はなし。そして、犯人の改心という最高のかたちで――

伏兵

某会社の会議室で、マニュアルを前にしての討論が始まっていた。中心は彼らのリーダー。神経質なまでの几帳面さで、仕事にも間違いがなく信頼されていた。

そんなリーダーと対峙し始めたのが、入ったばかりの男だった。彼の履歴書には転々と職を変えてきた記録もあり、騒動を巻き起こしてきたからだという噂もあった。

「マニュアルなんて、破るためにあるようなもんでしょ？ 固い頭で考えるから進展ないんすよ」

男は背もたれに体を預けながら、持ってきていたコーヒーを飲んだ。

もはや会議をしているという態度ではない。他の者たちも迷惑そうに眉をひそめた。

「マニュアルを守っていないから、クレームが絶えないんだ。それにこれは改善の話じゃない。反省の話だ」

リーダーの言葉に、男は「へー」と鼻を鳴らすように答える。尚も言い寄ろうとしている様子だった。

その時、「あっ」と言った女性が席を立った。彼女も新卒で入った人物だ。

「ごめんなさい。ちょっと出まーす」

悪びれる様子もなく女性は携帯を取り出すと、大きな声で話し始めた。

「あっ、まゆりんー。悩み相談？ うん、いいよ。聞いちゃう」
傍若無人な新人の行動に、リーダーは呆れるしかない。女性は構うことなく話し続けていた。

「あんな口先だけ偉そうにしている奴を切ってないの？ 馬鹿だよね、あいつ。自分が一番偉いって勘違いしてるんだからさ。他に転々としている男の言うことなんて信用ならないでしょ。輪を乱すよ

うな奴なんていないほうがいいじゃん。切っちゃえ、切っちゃえ」
恋愛相談でもされているのだろうか。

しかし、あまりにも的を射た話なので全員が押し黙った。そう、
全員の視線が先程まで反論していた男に向けられているのだ。

男も場が悪そうに俯いている。女性は携帯を切ると、何事もなかつたように席に着いた。

「続き、お願いしまーす」

女性が言うが、男は項垂^{うな}れたままで、先程の勢いは消えている。

リーダーは息をつくとき、マニュアルを中心とした話を続けた。会議は順調に進行し、男も反論することはなかった。

会議が終わると、全員部屋を出た。

女性が出て行くのをとめたリーダーは、彼女に注意した。

「会議中に恋愛相談はどうかしているぞ。ああいったかたちで終わったからいいものの、電源は切っておけ」

叱られた女性は笑みを浮かべた。そして、携帯電話を上司に突き出す。

「けど、あいつ静かになりましたよね。いくら私でも会議中に電話はしませんよ。ほら、切ってまーす」

確かに電源は切れていた。携帯をとる前も着信メロディーがならなかった。いや、振動音さえも聞いてはいない。

リーダーは立ち尽くしてしまった。機嫌よさそうに女性は口笛を吹きながら仕事場に消えた。

とんだ優秀な伏兵がいたものだ――

ピンクのマニキュアをつけた能ある部下を前に、今後の自分の立場を不安に思いながら、リーダーは重い息をついた。

望まれぬ発明

ある博士が『世紀の大発明』と評し、全人類が震撼するような研究を発表した。

しかし、彼の発明を聞いた科学者たちの反応は冷ややかなものだった。

そんなものが役に立つのか？ 資金援助などやめてしまえ。人としてどうかしている。

博士の発明は科学者だけでなく、一般人も理解するには程遠い呆れた大発明だった。誰もが陰口をたたき笑った。

誰が人体実験に付き合うんだ？ 自信があるなら自分でやってみろ。それが似合いだ。

博士の発明は興味という場所にとどまり、利用できるものではなかったのだ。その中、彼の助手が人体実験に名乗りを上げた。たった一本の注射で実験は終了する。

——実験は見事、成功した。

しかし、成功したというのに誰もが嘲笑した。助手は間抜けだと中傷したのだ。

が、博士の発明が記憶から葬り去られかけた頃になって、ようやく科学者たちは彼の真意に気づいた。慌てて彼のもとに訪れて非礼を詫びようとしたが、事は深刻化していた。

博士は三年前に亡くなっていたのだ。そのため彼の発明は、人体実験をした助手に委ねられていた。研究室の扉を叩きながら政府関係者、科学者たちは涙ながらに訴えた。

「お願いだ。あの薬を譲ってくれ！ 妻や子が危ないんだ」

「いや、この問題は全人類存亡の危機だ。あの薬だけが、我らの希望だ」

彼らの訴えを聞いて出てきたのは、人体実験を受けた博士の助手だった。人ではない姿に変貌した彼を見て、みなが眼を細める。足

元には小さなネズミがいたのだ。

「いつでも天才の発明は理解されないようですね。僕だけが彼の唯一の理解者だった。お蔭でこんな姿にはなったが、全人類の危機からは逃れられそうだ。薬？ 残念ですが、今は優先順位があるんですよ」

ネズミの姿になった助手は、二足で立ちながら器用に新聞を開いた。一面には大きくこう書かれていた。

『人類を滅亡に陥れる凶悪ウイルスが発生。全人口八割が犠牲に――他の生物に害はなし』

「博士は食糧危機の問題や地球温暖化という劣悪な環境に備えて、小さい動物になる研究をしたのですが、僕にとっては思わぬ利が働いたようだ。おっと、僕を殺して薬を奪おうなどとは思わないことです。人間に戻る薬をつくる方法は、僕の頭の中にあるのですから」

博士が息を引き取る前に、なぜ研究を認めなかったのか――誰もが後悔するしかない。

「その時がきたら善意ある人々に薬を……それが博士の遺言でした。さて、どなたが該当するのでしょうか。あなたたちは自分が助かるために、多くの犠牲を払ってきたのではないですか？」

助手の視線は政府関係者や科学者たちに向けられてはいない。その目は遠い景色を見つめているようだった。

契約

ある朝、男は現実離れした声を聞いて起きた。目覚めは非常に悪かった。なぜなら、視界に不気味としか言いようのない生物が飛び込んできたからだ。

「うわっ！」

男は身動きしながら生物を凝視した。そうしなければ、襲いかかってくるのではという恐怖があったからだ。

すると生物は、攻撃の意思はないというように、腰を下ろしてから話し始めた。

「驚くのも無理はない。けど落ち着いて聞きな。俺は悪魔だ。お前と契約したくてきた」

得体の知れない生物の発言に男は驚いた。確かに浅黒い体とコウモリのような羽根は、納得するには十分の容姿だ。男は唾を吞むと恐る恐る悪魔に聞いた。

「契約って？ 願いを聞くから、魂をくれとかいうあれか？」

「意外と人間に、そのルール浸透しているんだな……当たりだ。どうする？」

悪魔に持ちかけられて男は悩んだ。人間に浸透したルールだ。俺の奴隷になれとか、願いを百個にしろとか、悪魔たちは願いという名の横暴に付き合わされてきたに違いない。

「俺の奴隷になれとか、願いを百個にしろとかはなしだぜ」

男が言う前に悪魔は告げた。男は再び悩んだ。金か女か権力か……欲しい物はある。しかし、魂を代償にすると決断は難しい。

「では……俺を幸せにしてくれ」

考えたあげく、願いはそこに行き着いた。悪魔は目を丸くして男を見た。

「幸せ？ 分からないな……人間の幸せの単位ってどんなもんなんだ？」

「普通でいいってことだ。それと途中で契約を切るとかはないだろうな？」

「契約は最後まで破ることができない決まりだ。けど本当にそれでいいのか？」

「ああ、出来るか？ 人間の一生は結構、長いぞ」

男の願いを聞いて悪魔は「悪魔の寿命と比べたら」と了承した。

契約してから男は普通を満喫した。普通の生活をし、普通の家庭を築き、普通の地位を生きていく。

そして、普通に寿命を迎える時がきた。死期を迎えた男の枕元に飛来した悪魔が耳元で囁いた。

「さあ、お迎えが来たぜ。契約通りに魂をいただくとするか」

しかし、悪魔の言葉を聞いて男は笑った。

「契約通り？ 違うだろう。お前が言ったのは契約違反だ。魂を奪われるのは、俺の幸せじゃない。そもそも、お前が俺の願いを叶えていたのかも疑問だ」

悪魔は目を見開いた。全身を震わせて齒噛みした。

「騙したのか。今まで……」

「騙したわけじゃない。お前が騙されたんだ。それと……」

男は話をとめる。悪魔は血縛った眼で男を睨みつける。男は続けた。

「俺の幸せは家族の幸せでもある。言っている意味がわかるよな？」

悪魔は意味を理解したらしい。見えないものこそが、どんなものよりも価値があるのだということ。

「契約を解除してくれ。こんなの詐欺だ！」

泣き叫ぶ悪魔の声を耳元に、男は家族のこれからの幸せを願いながら、永遠の眠りについた。

感謝

ある屋敷に双子の兄弟がいた。彼らは生まれてすぐに親元から離され、屋敷に移り住んだ。いわば養子のような存在だった。

兄は行動力がありながらも、周囲の者たちを気遣う優しい少年。弟は冷静でありながらも、我が儘放題の自信家だった。

のどか長閑な春風を受けながら、兄弟はいつものように庭先でのんびりと会話を始めた。

「何て僕らは幸せなんだろう。こんな広い屋敷に住めて、たくさんの人に愛されて……昔を思えば、これほどの幸せはないよ」

兄は心地よい日差しを受けて目を細める。そして、全身を震わせ、喜びを語った。

兄の横に座る弟も鼻から息を吸い込む。桜の花びらが彼らの周りを舞い散っていく。

「そうだね。母さんと離れることにはなったけど、主人や召使い達も僕らを世話してくれる。思いつきり我が儘をいっても許してくれるし」

弟の話を聞いて兄はその頭を叩いた。弟は不服そうに兄を睨んだ。「何すんだよ。この前、召使い達に喧嘩するなって怒られたばかりだろ」

兄は自信家の弟を指導するように、度々叱っていた。養子として二人を迎えてくれた主人は寡黙で、教育熱心とはいえない。それでも愛してくれていることは確かではあるが、逆に弟を増長させてしまっているのは事実だった。

召使い達も弟の言動を許している。心優しい彼女たちのお蔭で、何不自由のない日々を送れるのだが、数日前には弟が、召使いに腹を立てて食ってかかった事件があった。

それが原因で弟は外に追い出されてしまったのだ。追い出された弟が、しばらく悲しい声で泣いていたというのが、その時の状況だ

った。さすがに屋敷の主人も召使いも弟が可哀そうになったのか、すぐに室内に入れ戻してはいたが。

「我が儘を言うから、怒られるんだろ。もっとちゃんとしないと、しつけられるぞ」

兄の言葉を聞いて弟は立ち上がると、庭先の端を思いっきり掘り始めた。あつという間に穴が出来あがり、弟の体は土塗れになる。

その時、弟の行動を見た召使いから悲鳴が上がった。

「おねーちゃん！ ジロがまた穴掘り始めてる！」

ジロと名前を呼ばれた弟は、召使いの一人に軽々と持ち上げられて風呂へと運ばれる。

残った兄の頭を撫でたもう一人の召使いが、奥にいる年下の女子を見た。

「タロはいい子なのにね。ジロはペットショップから買った時から暴れん坊だね。しつけ教室に通わなきゃ駄目かな？」

兄は言われて『ワン』と一声吠える。何の不自由もない一日を暮らす彼らの平和な日常。

兄をタロと呼んだ少女は風呂場でジロを洗う妹を見て、軽いため息を漏らした。

「ねえ、タロとジロって、私達のことをどう思っているんだろうね」

サービス

今の時代からみて近未来とされる時の中で、鮮血に染まった包丁を持った男が、タクシーの後部座席に乗り込んでいた。

タクシー運転手は人型のロボット。彼らは恐怖心を持っていないので、脅しにはのらない。そのため、ロボットは構造物が生み出す営業スマイルを浮かべながら、男に問いかけていた。

「本日はありがとうございます。どちらへ行かれますか」

男は居住まいを正すと、持っていた革製のカバンを抱え込んだ。拍子に開いた口から数枚の紙幣が飛び出す。男は慌てて紙幣を拾うと、ロボットに向かって叫んだ。

「金を出す。とにかく車を出せ！」

ロボットは首を百八十度回すと、後ろを見ながら車を発進させた。インプットされた接客マニュアルを守っているのだ。

徐々にスピードが上がっていく。ロボットタクシーは周囲の状況を把握しながら進むため、一度も事故を起こしたことがないという優良車なのだ。

ロボットは更に客を喜ばせようと音楽をかけた。すると軽快に流れていた音楽が途切れて、速報が伝えられる。

『先程、〇〇銀行にて、強盗殺人事件が発生しました。現在も犯人は逃走中です』

ニュースを聞いて男は舌打ちした。そして、手にした包丁をロボットに突き出した。

「おい、ニュースを消せ。お前は俺の言う通り、運転していればいい」

「はい、畏まりました」

従ったロボット運転手相手に、男は息をつきながら振り返った。警察車両は見えない。突き放したのだ。男は計画が完遂したと確信し、タクシー内に響く歓喜の声を上げた。

「やったぞ、これで高飛びできる。あっちで極楽生活を味わってやるんだ！」

男は札束を取り出すと頬にあて、至福ともいうべき感触を味わった。

しかし、タクシーが急加速した勢いで男は舌を噛んだ。かなり強く噛んでしまったので、唸るしかない。

なぜ、急加速したのか——顔を上げた男の眼前に、思いがけない光景が広がっていた。

「行き先は高飛びで、極楽生活ですね」

ロボットの答えが、男の行き先を示していた。道の先がない。あるのは眼下に広がる摩天楼と青白く見える空だけだ——

恐怖心の欠片もないロボットは、サービス精神を第一に崖に向かって飛び出したのだ。

到着地点が近づいてくる。ロボット運転手は構造物の笑みを浮かべながら言った。

「到着しました。料金は……」

金額は伝えられないまま、地面との再会という名の激突音が彼らへの答えとなった。

極楽浄土への渡船料を表すかのように札束が舞い散る。半壊した顔で男を見つめたロボットは、瀕死状態の彼に向かって最期の言葉を告げた。

「ありがとうございます。我が××タクシー社は、お客様へのサービスを第一に、安全をモットーに活動しております。おや、すいません。まだ目的地に到着できていませんか？」

月夜

前日に降った雨で浄化された夜空に、月面模様まではっきり見える満月が浮かんだ。

ここは都心から離れた一軒家の縁側。淡い月光で照らされた庭には、男と女が肩を寄せ合う影が伸びている。

二人は新婚旅行から帰ってきたばかりだった。荷物を片付け終え、一息ついたところで月に見入っていたのだ。

体温を伝え合う時の中、男は満月を見ながら口を開いた。

「綺麗な満月だな。月にはウサギがいるって、昔の人が想像したのがなんとなくわかるよ」

女も「そうね」と相槌を打つと、男の話に続けた。

「だけど、国によって月の模様の喩えが違^{たと}うのよね。女性の横顔とか、ライオンとかも聞いたことがあるわよ」

女の話が終わった途端、男の腹が音を出した。帰国と荷物の片付けという二重の忙しさから、食事をすることも忘れていたのだ。

まさか腹から返事が聞けるとは思ってもいなかったのだろう。女は軽い声で笑った。

「今夜は月見そばにでもしましょうか。あと、月の模様は女性の横顔だから、母の味付けを真似して……」

「いいね。それとウサギは餅をついているから、餅も入れようか。満月を見ながら、ここで食べると、また味も格別になりそうだ」

同意した男は、言うてからあることに気づいた。

満月、餅をつくウサギ、女性の横顔……言ったワードを繋げるつもりなら、『ライオン』が足りない。どういったかたちで含ませればいいのか。

「じゃあ、ライオンはどうするんだ？」

「ライオン？　すぐ近くにいないじゃない」

男の問いに答えた女は、何を考えたのか肩を寄せてきた。旅行先

で試していたのだろうか。嗅いだことのない魅惑的な香水の香りが、男の鼻腔を通して脳を揺らす。

男の思考は混乱した。急に彼女が積極的になった理由が分からない。しかし、すぐに『ライオン』の含みが思い浮かんだ。そうか、俺に夜の獅子になれというのか。

ライオンはその手に関して、かなり精力的らしい。食事を摂らずに一日中、励むのだそうだ。

男の中で結論が出た瞬間、女の手が膝の上に置かれた。男は興奮した。今度は耳元に近づいた女の唇から出される温かい呼気が、耳殻を通して官能を揺さぶる。

理性が飛んでしまうと感じた時、今度は女の手が微妙な位置に置かれた。

『据え膳食わぬは男の恥』

そんな言葉が浮かんで、男は女の両肩をつかんで引き寄せる。ところが、女の怖いほど真剣な眼差しが目に入った。

「もうっ、忘れたの。私は獅子座でしょ！」

思いがけない女の叫びに、男は呆然とするしかない。意味を取り違えていたと後悔してもすでに遅い。シンガポールで撮った『マールライオン』の写真が飾られないまま、テーブルの上に置かれていた。

星の行方

何週間もの宇宙飛行を続けていた彼らの前に、青い惑星が姿を見せた。

星を映す画面上に『Earth』という文字が現れる。瞬間、宇宙船の中は湧き立った。

画面は映し出された星の住民の翻訳も兼ねている。つまり、文字が出るということは、文字を使いこなす高度な生命体が、星に存在することを意味していた。

「どうやら、あの星の住民は自分たちの星を『Earth』と名付けているようだ。それでは次に生命反応を調べようか」

宇宙人たちの期待は高まった。これほど美しい星を見たことがなかったからだ。

すると船内に、またどよめきが起きた。生命反応数が彼らの考えているものよりも、はるか上をいくものだったからだ。

「すごい。生命反応が無数にあるじゃないか……この星は住みやすい場所に違いない」

「ああ、これなら俺たちの第二の故郷にできる。そのためには滅ばさないといけないな」

「そうだな」

宇宙人たちの故郷は住めない状態になり始めていた。星を蝕みはじめたガス。突如、出現した巨大生物。人口は激減し、今でも巨大生物に仲間は食われ続けている。

「さてと……では始めるか。ガス放出開始！」

宇宙船から大量のガスが撒かれる。彼らの世界を蝕んでいるものだ。

ところが、星の住民が映し出される画面には、なんら変わりもない姿があった。

「馬鹿な。奴らは死なないのか……くそ、第二段階だ。奴を解放し

ろ！」

次に彼らを食い続ける巨大生物が星に降ろされた。苦勞して捕獲してきた生物が、星の住民を食らい尽くす姿を彼らは想像した。

ところが、巨大生物は簡単に星の住民たちに殺されてしまった。しかもその死体が食べられるという奇行を直視することとなった。

「なんという恐ろしい生物だ……こんな生物相手に俺たちがかなうわけがない」

「そうだな。進化途中の生物と判断したのが間違いだった。こんな星は見切りをつけよう」

宇宙人たちは宇宙回線でトップの意見を聞くこともなく、その場を後にした。

どんな方法でもいいから、侵略しろと言われたら、星の住民に殺されてしまうと確信したからだ。

二日後——彼らが去っていった星、地球上では、仰天ニュースと題して、科学者たちが討論会をしていた。

「上空に宇宙船が見えた途端、空気濃度が上昇しているのです。更に落とされた生物……地元の住民は、神がくださった贈り物として食したそうです」

「外見も味もそっくりだったようですね。それに、あんなに友好的な宇宙人はいないと思いますよ」

画面上には、宇宙船の中にいる生物がはっきりと映し出されている。

科学者は興奮を隠せないまま、更に話を続けた。

「魚類姿の宇宙人とはね……彼らには空気も毒だし、クジラなんて天敵でしょう。私たちのためにここまでしてくれるなんて。是非、友好関係を結びたいものです」

習性

ある都市の一角に、見世物小屋と書かれた看板がかけられた建物があつた。

現代では数少ない出し物に、誰もが興味を示して並んだ。並ぶ人数は一人二人と増えていき、行列はいつの間にか街の名物になっていた。

中で披露されている演目は、猿の腹話術。

腹話術をしているのは猿で、手にした人形と掛け合い漫才を披露するというものだった。特に「お猿さんが可愛い」と子供には評判で笑いも絶えなかった。

ところが、客の一人がこの技を酷評した。

「録音された声にあわせて、猿が人形の口を動かしているだけだろう」と、言い放ったのだ。しかも、酷評したのが名の売れた批評家だっただけに、客の反応は敏感だった。

見世物小屋の客足が激減した一週間後——新たな演目が披露された。

今度は猿が漫談を披露するというものだった。舞台上を縦横無尽に動き回りながら、世相を反映した笑いを連発する。

子供には「お猿さんが可愛い」と評判で、大人には漫談の評価が高かった。見世物小屋に笑いの空間が復活した。

ところが、客の一人がこの技を酷評した。

「録音された声にあわせて、猿が動いているだけだろう」と、言い放ったのだ。しかも、酷評したのがまた名の売れた批評家だっただけに、客の反応は敏感だった。

見世物小屋の客足が激減した一週間後——新たな演目が披露された。

今度は猿と飼い主である人間が、漫才を披露するというものだった。漫才といっても、前とは違って猿は話さない。漫談をする飼

主がボケたところで、猿が絶妙な蹴りを入れるというものだった。これは高い評価を得た。評論家も何も言えなかった。伝統芸能の猿回しに近いと言われて黙ってしまったのだ。動物愛護団体も何も言えなかった。

とにかく猿がその場を離れたがらないのだ。こんな反応をするのなら、きっと飼い主も深い愛情をもって育てているのだろう。みなが納得して芸を楽しんだ。

一つの演目が終わると一時間の休憩が入る。客の入れ替えと、猿と飼い主の休憩時間も兼ねているのだ。

楽屋には、猿と飼い主がいた。

まず先に、座布団の上に正座をした猿が、湯飲みを手に息をついた。

「人間ってのは、こうも疑い深い生き物なのかね。目の前にある真実からも目をそらすばかりで、本質も見えていないようだ」

言いながら猿は茶を飲むと、飼い主を一瞥した。飼い主は差し出された猿の腕を取ってマッサージを始める。そして、猿の話に続いた。

「進化した猿の姿を見せたかったのに、これでは意味がないよな。真実を語るには、あと何十年必要なのだろうか……まあ、僕は君のお蔭で食うには困らないのだけれど」

飼い主の言葉を横に、猿は棚から一冊の本を取り出した。

「何十年ですむのか？ 未だに信じていない人間がいるというのに」猿の手にあるのは『ダーウィンの進化論を説く』というタイトルの本だ。猿は重い息をついて最後に説いた。

「偉人を信じないとは人間はどうかしているよ。俺たちはリーダーに従う習性だというのにな。どこでどう概念は進化したんだ？」

王者2

人類が知り得ない未開の地に、世界中の動物たちが住むという原始林があった。

毎日恒例となった雑談会で、まず木上にいたカメレオンが発言した。

「俺はやっぱりこの中では一番遅いだろうな。きっと相手になりやしないよ」

カメレオンの話が終わると、隣にいたナマケモノがのんびりとした口調で続いた。

「ほんま？ おではトイレに行くのも億劫なんだけど、動きとしてはどうだろーか。けど、人間が付けた名前がひどいと思わん？ おでは生きることには『必死獣^{ケモノ}』だよ」

ナマケモノの親父ギャグに、他の動物たちから「むしろ生のケモノ！」「負けモノでもないよな！」という声上がる。すると、

「俺は……この場にいる全員が遅く見える」

動物たちだけでなく、原始林の木々が震えあがる、抑揚のない声が響いた。

皆の視線が向けられた先には、百戦錬磨の勇士である雄チーターがいた。

舌なめずりをしながら陽炎のように動いた彼に、全員が緊張して身構える。

「まあ、構えんなよ……ここで全員を標的にしようって訳じゃないさ。この俺にだって追いつけないものがある。それが人間だって言いたいんだ。人間を追って撃たれた仲間を見たことがある。奴らを追うのだけは遠慮したいね」

疾走の王チーターの話が終わると同時に、

「俺は人間が遅く見える。いや、ここにいる全員も遅く見えるね。」

俺たち一族は人間と、ずっと争ってきたんだ。俺が本気になれば思いつきり追い抜いてやるよ」

どこからか、男性の声が響いた。

自信ある発言に、動物たち全員が息を呑みながら声のした方を見る。しかし、姿がない。

「お、面白い！ この俺と勝負しな！」

チーターも声を張り上げながら、尻尾の先を立てて必死の競争姿勢をとる。

「どこ見てんだ……とっくにお前の鼻の上にいるよ」

すると、姿のない声は思いがけない言葉を発して、チーターを笑った。

チーターは寄り目になりながら、鼻の頭を凝視する。鼻の上にいたのはハエだった……

「俺のスピードに驚いたか？ どうだ。標的にすら出来まい！」

小さいから見えなかったんだよ！ と、チーターが突っ込んで鼻の頭を叩こうとした途端、物凄い勢いで飛んできた何かが、ハエを攫^{さら}っていった。

飛んできた何かが戻っていった軌道を追って皆が見る。

「……まずっ！」

自称、原生林のスピード王者を食したカメレオンが食事の感想を述べると、チーターは、

「一番早いのもって、君の舌なんじゃない」と、深い息をつきながら言った。

面の皮

ある一流企業の待合室に、身なりを整えた青年十人が重い空気を纏って座っていた。

彼等は人生の起点を前にしていた。それは、面接から就職という社会人への道だ。

誰もが緊張した面持ちで一言も話さない。前もって採用される人数が五名と決まっていたからであった。

将来の競争相手になるだけではなく、踏み台にするべき相手と同じ部屋にいるのだ。

入室してきた面接官が「もっと肩の力を抜いていいよ」と言っても、彼らには無理な注文でしかない。

しかもその企業は、就職難や不景気といわれる中でも変わることのない、高額な給与とボーナスを支給していた。

そのため、第一志望としてあげられる競争率の高い企業でもある。面接に来るのは一流大学を卒業したエリートばかりだ。彼らの履歴書にも誤字はない。面接官の質問にも迷わない。

——ボロを出してしまった者は終わり。完璧人間でなければ確実に落とされる。

彼らの中では、既に競争が始まっていたのだ。

ところが、いざ面接となると十人全員が呼び出された。通常、面接は一对一だ。

当然、青年たちは困惑した。適性検査なら同じ場所でやるが、今日は面接と言われていたからだ。

十人全員が席に着いたのを確認すると、面接官は質問を始めた。

「では、我が社を志望した動機を聞こうか」

一人目、二人目と答えていく。みなが似た動機なのに対し、最後の一人が胸を張って答えた。

「今の企業をぶち壊したいからです。でかい場所だとそれが出来る

と思ったんですよね」

突拍子もない発言に面接官は目を丸くした。横には社長や社長の息子もいたからだ。

「次に……自分の性格を語るとすると、どんな人物なのか」

一人目、二人目と答えていく。みなが似た説明なのに対し、最後の一人がまた胸を張って答えた。

「目立ちたがり屋ですね。そして俺、誰にも負けたことないんで、負けず嫌いです」

彼が答えた瞬間、「もういい」と社長が口にした。そして彼の前に立つ。

「気に入ったぞ若造。君は採用だ。他の者は追って連絡をするので、詳しいことは面接官に聞きたまえ」

言って社長は部屋を出た。面接官は重い息を吐いて頭を抱えた。

数時間後、社長と面接官は会議室にいた。誰を採用するか決定するためである。

面接官は採用者を聞くよりも先に、社長に質問した。

「社長……なぜ、あの青年を採用したのですか？ 私は納得がいきません」

あの青年よりも優秀な人材はいたはずだ。天狗口調は企業の輪も乱しかねない。

そんな面接官の質問に社長は冷静な表情になると、壁に貼っている会社方針を指差した。

そこには『他社が思いつかない個性的な企業を目指す。誇れる個性ある能力を身につける』とあった。

「君は気づかなかったのか。あの青年たち全員が会社方針を見ていた。それが理由だよ」

面接官はただ会社方針を見ながら、大きな息について考えた。

あの青年にそこまでの策略があったのなら――表面上の履歴者や面接など必要ないのかもしれない。

そして、履歴書は束ねられ段ボールの中に入れられた。

運

男は雲の階段をのぼり続けていた。既に数時間は経っているはずだが、疲れも空腹も感じない。そして、周囲に広がるのは、先の見えない黄金の景色だけだ。

男は息を吐いた。疲れたわけではない。自分の人生に嫌気がさしていたのだ。

これまで自分に振りかかってきた災難ときたら、不運としか言いようがなかった。

とにかく、何もないところで転ぶ。外に出れば必ず鳥のフンの直撃を受ける。雨の日は車が飛ばした汚水の犠牲になる。

賭け事だって勝ったことがない。懸賞にも当たったためしがない。ここに来た理由も最悪なものだった。上司に使わないから貰ってくれと言われてポケットに入れたキャバクラのライターを、妻に発見されてしまったのだ。

それだけならましだった。実家に帰ると言って、家を出た妻を追いかけてようとした瞬間、車に轢かれた。

後のことはよく覚えてはいない。倒れている自分を遠目で見て、天上に持ち上げられたような記憶だけが残っている。

これは天国の階段に違いない。もし生き返れるのなら——と、男は考えていた。

「こんな俺に、妻はついてきてくれていたのに……なんでこんなことになってしまったんだ。愛していると言いたい。それだけが心残りだ」

思いが言葉になって吐き出された。それでも現実には残酷だ。目の前に門が見えてくる。

天国の門だろう。男が近づいた途端、門は音もなく開いた。

男は目を大きく見開いた。眼前には光を放つ人物が座っていたからだ。

「お前さんが、今日きた新入りさんでっか。人生経過を確認するさかい、ちょっと待っというてえな」

男は神様らしき人物が、ぶ厚い本の中身を確認する様子を、ただぼんやりと見ていた。

すると、ページを捲る神様らしき人物の表情が変わっていった。

尻込みしてしまうほどの真剣な表情に、男は息を呑んだ。

「これは手違いや……お前さんの徳が人生に反映されてへん。すぐに配慮するさかい、手え出して」

言われるままに男が手を出すと、『聖徳』という判が押された。

「これで運がつくはずや。ただ、今回は運が悪かったと諦めてもらうしかないけどな」

神様らしき人物の言葉を聞いて、男は肩を落とした。妻に感謝の気持ちを伝えることもできないのか。

途端に、涙があふれてきて、目の前がかすむ。

瞬間、男は足の踏み場を間違えた。体勢を崩して倒れこむと、時間をかけてのぼった長い階段を転がり落ちていく。

そして男はいつの間にか、途中で意識を失ってしまっていた。

目が覚めると、そこは病室だった。泣き声に気づいて隣を見ると妻がいた。

「あなた……よかった。事情は全部聞いたわ。それにうわ言であることを……勘違いして、ごめんなさい」

男は一度、呪った人生に感謝した。今回は不運が良いほうに転んでくれたらしい。

そして、手にあるのは『聖徳』の文字。これはきっと現世に反映されるのだろう。

不運で階段を転げ落ちたのだろうから、きっと次に同じ場所で転ぶことはない。

それでも、愛すべき妻と会えるのは、この一生だけのはずだ。

男は「ただいま、愛している」と言うと、妻を強く抱きしめた。

代価

人知が及ばない不可思議な物語というものは存在する。物語が存在する場所は、異界と現実世界の境界線上、一軒の店にあった。

今日も訪れた者が、店の前で列をつくる。といっても、人数は数名である。

時間になると、看板を手にした店主が扉を開けた。

「それでは、入る前にルールをお読みください。了解されたのみ中へどうぞ」

店主はルールが書かれた看板を置くと、部屋の奥の席に着いた。みなが見守る中、先頭の男性が店に入る。扉が閉まったのを確認した店長は、台帳を開きながら男性に告げた。

「あなたの預かり値は七のようですね。加算しますがよろしいですか」

男性客は「それだけ？」と目を見開いた。手は微かに震えている。

「間違いはありませんよ。不服なら帰っていただいても構いません」

店長の言葉に男性は齒噛みしながらも、「仕方ない」と愚痴をこぼして帰っていった。

次に入ってきたのは、短身で横太りの男である。男は店に入るなり、金齒が占める大口を開けて笑った。

「あの男は七だって？　かかつ、随分と小さいもんだ。俺はすごいぞ。この腕ひとつで大企業を生み出した。従業員も俺には感謝しているはずだ」

店長は台帳を開くと、男に向かって告げた。

「あなたの貸し値は四十ですね。減算しますがよろしいですか」

聞いて男は立ち上がった。顔面を紅潮させ、店長の胸倉をつかんだ。

「貸しだと？　訳のわからんことを言うな。俺を誰だと思っている。もう一度調べろ！」

「減算します。よろしいですね」

店長が告げた途端、男は仰向けに倒れて動かなくなった。すぐさま、従業員が駆けつけて男を運び出していく。

次に入ってきたのは、車椅子の少女と母親だった。少女は顔色が悪く、せきこんでいる。

入るなり母親は涙を流しながら、店長にすがり付いた。

「この子を助けてください。原因不明のぜん息に悩まされて、あと一年も持たないと言われてるんです」

店長は少女を見つめると台帳を開く。そして、告げた。

「あなたの預かり値は十二です。更にある方から四十いただいています。加算します。よろしいですね」

聞いて母親は感涙し、少女は快復して帰っていった。最終の客を見送った店長は閉店準備を始める。

そして、『感謝を代価とし、寿命として変換いたします』と書かれた看板を手をに咥いた。

「どうやらあの男は、自分の会社が原因で、近くに住む少女の肺が侵されたことに気づいていなかったようだ……」

人知が及ばない不可思議な物語というものは存在する。それは異界のそばにある。

来店の際は注意書きをよく読み、ルールを守るというのが暗黙の了解となっている。

そして、預かり値をゼロからプラスに戻せた者は、台帳記録上では少数しか存在しない。

めい探偵【本格ミステリー推理編】（前書き）

今回は、約千文字で終わる本格ミステリーを用意しました。
犯人は誰か。密室トリックの謎は――

名探偵になったつもりで楽しんでいただければ幸いです。
ヒントは『思い込みにご注意ください』です。

めい探偵【本格ミステリー推理編】

東京都某管轄内で殺人事件が発生した。

まず先に異常を察知したのは新聞配達員だった。新聞が玄関の郵便受け口に挟まったまま、溜まり続けていたのだ。

入電を受けて、刑事が現場に駆けつける。

ドアを叩いても反応がないことから、業者に頼んで玄関を開けさせた。

中に入ったところで、住人である金野こんのがうつ伏せの状態で死んでいるのが発見された。床には血の溜まりが出来ていた。

玄関の鍵はこたつの上にあったので、はじめは事故かと思われた。しかし、凶器が見つかったことで殺人事件と断定、密室殺人の可能性が濃厚となった。

難解な事件に刑事は頭を抱え、一人の男の頭脳を頼った。そこで、めい探偵の登場である。

警察が被疑者としてあげたのは三人の人物である。概要を知らない人物たちを前に、めい探偵は語る。

「お呼び立てして申し訳ない。あなた達に伝えなければならないことがあります。金野さんがお亡くなりになりました」

「死んだだと？」

聞いたのは被疑者の一人、黒澤くろさわという男である。被害者から金を借りていることから、動機は十分にあった。

「いつ死んだんだ。どうして……」

次に灰田はいだという男が唇を震わせる。被害者とは旧友であり、よく酒を酌み交わしていた。

「あの人がそんな……誰に殺されたの？」

両手を口で押さえながら崩れ落ちたのは、愛人の白鳥しらとりである。

全員が被害者とは親密な関係にあるのだが、アリバイがない。誰が犯人であってもおかしくはない。

これをめい探偵は、読み切り短編で解決しなくてはならない。（作者都合により）

めい探偵は悩んだ。どこかに謎が隠されているはずだ。

犯人は誰か？ 密室殺人のトリックは――

めい探偵のシンキングタイム開始。（みなさんもお考えください）

彼らにはアリバイがない。動機があるのは黒澤だが……

「黒澤！ そうか」

めい探偵は黒澤を見る。三人の姓名に気づいたのだ。

警察用語で犯人は黒という。被疑者は黒澤と灰田と白鳥。

ということは、犯人は――いやいや、そんな馬鹿な推理はないと首を振っためい探偵。

そして、あることを思い出して口にした。

「そういえば俺……男が殺されたって言ったっけ？」

めい探偵の何気ない一言で事件は解決した。うなだれたままの犯人を、刑事が連行していく。

彼は迷探偵。度々こういうことがある。事情聴取で全てがわかれば万事解決だ。

そう、誘導尋問は探偵ものにおける常套手段。失言した犯人が悪いのだ。

迷探偵は息をつくと呟いた。

「後で密室殺人のトリックを犯人に聞こう……」

めい探偵【本格ミステリー推理編】（後書き）

シンキングタイム前でわかった方は、上級ミステリー者認定です。

（←答えは下）

・犯人は白鳥。

めい探偵は「〳〵金野さんがお亡くなりになりました」と言っている
ので、「殺された」とわかっているのは犯人のみ。

「あの人がそんな……誰に殺されたの？」のセリフから、犯人は白
鳥だとわかる。

・密室殺人のトリック

密室と思わせておいて、じつは密室ではないというトリック。

＞新聞が玄関の郵便受け口に挟まったまま、溜まり続けていたのだ。
新聞受けから釣り糸によるトリックが可能。

【解説】

密室トリックの『古典』の一つで、『糸と針のトリック』ともいわ
れているものとなっています。

ほれ薬

ある西の孤島に、ツタとコケが密集共存する古城があった。

四方は断崖絶壁であり、眼下の海は岩礁で囲まれている。そんな前人未踏ともいえる過酷な環境下にある城の住民は一人。推定年齢三百歳になる魔女だった。

「さあさあ、今日は人間どもに魔女の恐ろしさを教育してやる日だよ」

魔女は助手のネズミが持ってきた小ビンの中身を確かめながら、次々と大釜の中に放り込んでいく。

そして、煮え立つ不気味な液体の中に棒を入れて、掻き回し続けた。

「これはね、飲んだ人間が私の言うことを聞くという薬さ。男も女も関係ない。私はこいつを水源に流し込んでやるつもりなのさ」

いつもの魔女の独り言に、助手のネズミが「チチッ」と返す。「そう、ほれ薬というやつだよ。それもただのほれ薬じゃない。一生効果のあるものさ。しかも相手は私の言うことを聞くから思いのまま！」

興奮して続ける魔女に、助手のネズミが「キチチッ」と返す。

「僕も欲しいって？ 仕方のない子だね。まあわかる気もするよ。好きなメスでもいるんだろう？」

助手のネズミは「キチッ」と返すと、勝手に知ったように自分の毛をむしって魔女に差し出した。

魔女はほれ薬を少し小釜に移し替えると、助手ネズミの毛を入れて煮立たせた。

「好きなようにお使い。但し効力が強いから扱いには十分気をつけなよ」

魔女に渡された小ビンのほれ薬を手し、助手ネズミは飛び跳ねながら奥の部屋へ入っていった。

「早速、効果を試そうってわけかい。まあいいさね。私は私の楽しみを実行しなくてはね」

魔女は大釜の中に自分の髪の毛を入れると、じつくりと長時間かけて煮立たせた。

そして、ほれ薬製造は大成功。後に効果は絶大とわかった。

ある西の孤島に、ツタとコケが密集共存する古城があった。

四方は断崖絶壁であり、眼下の海は岩礁で囲まれている。そんな前人未踏ともいえる過酷な環境下にある城の住民は一匹と一人。推定年齢十歳になるネズミと推定年齢三百歳になる魔女だった。

「さて、魔女よ。人話を話せる薬、長寿の薬に続いて、今日は魔法を使える薬をつくろうか。さてよ……その残ったほれ薬を水源に流し込んで、人間を君の手下にするのもいいな」

いつものネズミの独り言に、助手の魔女が「そうですね」と返す。「僕の言うことを聞く君だ。人間も僕の意のままに操ってくれるはず。そして僕は最後には君の魔術で人間になろう。君と愛を語り合うために」

ほれ薬は大成功。後に効果は絶大とわかったのだ。

助手ネズミが魔女を愛して食事に入れた、たった一滴のほれ薬によって――

襲撃者

男は暗殺者に追われていた。

暗殺者の姿を確認して物陰に隠れる。見つかってしまえば終わりだとわかっていた。

敵は躊躇せず、残忍非道な行いをする組織だ。それを証拠に家族も殺された。

今は無力な自分を呪って逃げ続け、家族の冥福を祈るしかない。しかも暗殺者は最新の武器を装備しており、一撃で死に至らしめる格闘術も持ち合わせていた。

隠れながら思う。

俺が一体なにをしたというんだ？

力があるのなら、復讐してやれるのにと。

しかし、どこにそんな力があるというのだろうか。

自分は格闘の基本すら知らない。手元に武器といえるような物もない。たった一つの武器は逃げ足だ。暗殺者を切り抜けるには十分という自信がある。

それでも、この地を離れるわけにはいかなかった。愛しい場所には家族との思い出がある。暗殺者に奪われることは我慢がならない。憤死覚悟で、復讐を果たすか？

覚悟を決めた。どんな状況に陥っても立ち向かい続けよう――家族は復讐を望まないかもしれない。力及ばないのもわかっている。それでも一撃、相手に手傷を負わせることができれば本望だ。意を決すると物陰から飛び出し、暗殺者の一人と対峙した。殺意のこもった暗殺者の視線が向けられる。

「いたぞ、追い詰める。逃がすな！」

周囲に響く暗殺者の怒号。

足音が響いたかと思うともう一人の暗殺者が姿を現し、挟みこまれた。暗殺者の手には殺傷武器がある。

動きをとめたら、狙い撃ちにされて終わりだ。

地面を蹴った反動を利用して飛び、暗殺者の一人に体当たりを試みた。

「うわっ！」

思いがけない反撃だったのだろう。暗殺者が声を上げる。

ところが直後に、暗殺者の攻撃を受けて床に叩き伏せられた。爆発的な腕力の前に成す術もない。

顔を上げた時には、既に二人目の暗殺者が武器を構えていた。

「が……」

慌てて反射的に飛び退いたが、回避したとは言い難かった。呼吸ができなくなり、慌てて建物の中に身を隠す。

敵の武器が何だったのか――

全身に小刻みな震えと寒気が襲ってきて、置かれた立場を理解する。

くそ、毒ガスか……

急激な睡魔に、身を任せることしかできない。

意識を失うまでの数十秒が何時間にも感じて、脳裏には家族との思い出が走馬灯のように駆け巡っていた。

男が息絶えた場所――そこは僅かな光しか届かない、粘着性のあふ生臭い空間であった。

暗殺者たちは建物に入ることはせずに、入口である小さな扉から覗き込む。

男に死を与えた二人の人物は、暗殺者とは程遠い容貌をしていた。眼鏡を掛けたサラリーマンのような男性と、女の子である。男が本当に息絶えているのか、確認するのに彼等は慎重であった。

そして任務が完了したのを知ると、暗殺者の子供が口を開いた。

「どう、お父さん。死んだ？」

「ああ、殺虫剤から逃げようとしたようだが、うまいことゴキブリポイに入ってくれたな。このまま捨てることができるぞ」

憐れな男は暗殺者に運ばれ、非情にも逃げ込んだ建物とともにゴミ箱へ投げ捨てられた。

伝承と掟

ある村で深刻な事態が発生していた。

突然、働き盛りの男が姿を消したのだ。置いていかれた女たちや子供たちは泣いて日々を過ごすしかない。

しかし、騒動から一週間がたった頃、行方不明になっていた男が一人、村に戻ってきた。村人全員が男の無事を喜び、この一週間に何があったのかを聞いた。

男は仕事に出ただけだと答え、野ウサギやキノコといった山の幸を村人たちに披露した。

しかし、これに村人全員が首を傾げた。普段は取れない食材ばかりである。

貴重な食材は山の奥に入らなければ、手に入れることは出来ない。絶対に山の奥に入るなという伝承と掟があったからだ。

山には人狼がいる。もし、見つかったら、たちまち咬み殺されてしまうであろう。

皆が男は掟を破ったと確信した。しかし、騒動はそれだけでは終わらなかった。

二人目三人目と姿を消していた男が村に戻ってきた。皆が彼らにも理由を問う。戻ってきた男たちは首を振って、出掛けていたとだけ答えた。

村人たちが不信の念をいだいた。彼らは人狼の邪悪な魂に冒されてしまったのかもしれない。

村の男たち全員が農具を手に入山に入る。女たちは安全のために村に残り、男たちの帰りを待った。

奥に進むにつれて道は険しくなり、生い茂った木々が行く手を阻む。

村を離れてから三時間後――

ようやく森を抜けた。ところが、男たちは驚きで言葉を失った。

彼らの目には美しい田園風景と養鶏場、湯気がのぼる温泉が飛び込んできたのだ。

「これは一体どういうことだ……我々よりも遙かにいい暮らしぶりじゃないか」

すると、奥にある小屋の扉が開く。全員が身構えると同時に、女性^{せい}が姿を現した。

ところが人間ではない。尻にあるのは獣の尾、頭にあるのは獣の耳だ。村の男全員が、その姿に目を奪われる。

ぴよこんと耳を立てた女狼^{じようろう}が、男たちを見て尾を振った。

「あ！ おじさんたち、また来てくれたんだあ。今度はなに教えてくださいのお？」

女狼の色香のストライクを受けた、男たちの農具が次々と落ちる。更にもう一匹、二匹と、女狼の登場が続く。

「どこかの国では菜食健美^{さいしょくけんび}って言うんだって。私もそれを目指すつもり。うーん……クワ重たいなあ」

今更、彼女たちにそれは才色兼備^{さいしょくけんび}だとは言いつ返さないほうがいいだろう。人を咬み殺す人狼が、それで草食系女子になってくれれば言うことなしだ。

同時に駆け寄せ寄った男たちはクワを持ち、「僕が手伝います」と叫んだ。

かくして、村の伝承と掟は守られた。

『山には人狼がいる。もし、見つかったら、たちまち咬み殺されてしまうであろう』

それが女狼^{じようろう}ならぬ、女郎^{じようろう}だとは、口が裂けても村の女たちには言っではならない。

弱点と災難

安全で危機管理が足りない民が住んでいる国といえば、まず日本があげられるだろう。客に頭を下げる精神は、世界から見ても驚きの行為だ。

その日本の特質を利用して、ある男が上陸した。

全身黒ずくめ、テールコートとシルクハットといった男の姿は、コウモリを思わせる。風体は変わっているが、彼は日本語の勉強をしてきていた。

まず男は、街を歩く女性に目を向けた。

「駄目だ。臭いがキツイ、銀細工をしている。ヴァンパイアハンターをまいた方がいいが、やはり血を吸うのは難儀か……」

男は吸血鬼だった。人間との混血なので、日光という弱点は解消されているが、やはり一週間に一度は血を吸わないと極度な倦怠感、吐き気、頭痛、悪寒、その他もろもろの症状に悩まされる。

その時、獲物の物色を始めた吸血鬼の嗅覚が、魅力的な匂いを嗅ぎつけた。

「血液が不足していまーす。ご協力をお願いしまーす」

女性がプラカードを持って、呼び掛けをしている。

魅力的な匂いは、女性が立つ階段の奥から流れてきていた。それも新鮮な血の匂いだ。

「人間も血が不足しているのか。それにしても血の匂いがするが」

吸血鬼はプラカードを持つ女性に近づいていく。

女性は近づいてくる男を、吸血鬼だとは知らずに笑顔を浮かべた。

「献血していただけるのですか？　ありがとうございます」

女性の言葉を聞いて、吸血鬼は首を傾げる。

「献血していただける？　いただけるのか……嬉しい限りだな」

「ありがとうございます。階段を下りて突き当たりの部屋になります」

吸血鬼はほくそ笑んだ。この国は血液を提供してくれるらしい。階段を下りた吸血鬼は扉を開いた。

瞬間、ある臭いが鼻をつく。にんにくの臭いだ。

奥にいる人物が臭いの根源だった。

「あそこのスタミナラーメンうまいよな。餃子も最高だし」

スタミナラーメンと餃子が一体何なのか、吸血鬼にはわからない。臭いに負けて逃げようとした途端、白衣の恰幅天使が吸血鬼の腕をつかんだ。

人間も血液が不足しているのだ。

吸血鬼は弱点のニンニク臭で声も出せないので、血液検査の後に採血された。

すると、血液検査で希少な型とわかったのだ。

人間との混血である彼の血は人を吸血鬼にはしない。それに吸血鬼だ。希少な型であるのは当然である。

俺は吸血鬼と言っても、もはや手遅れだろう。

言えば、ヴァンパイアハンターが自分を殺しに来るだろうという不安が常に纏わりつく。

血を抜かれてしまえば体力が落ちるので、人を襲う気もなくなる。だから、吸血鬼はこう言うしかないのだ。

「トマトジュースをください」と。

そして現在――

彼は人を救う存在になった自分が嫌いではなかったりする。

打算と誤算

そこに光があるというのなら、天井から吊るされたオレンジ色の電球だけ――

一人の科学者が地下室で人類史上初となる、ある生物の創造を成功させた。

「これこそが最高の容姿体型を持つ、女性型フランケンシュタインだ！」

著書にある「フランケンシュタインの怪物」は男で容姿が醜かった。

科学者はその逆を追求したのである。すなわち、怪物を魅力的な女性にする。

同時に利点も追求した。人間と同等の知性と優れた体力。

更に科学者は、物語の中のフランケンシュタインの怪物を教訓に先手を打った。

伴侶を用意することである。

自分の伴侶となる者が欲しい。怪物は願いを聞き入れてもらえなかった怒りに身を任せて、創造主の妻と子供を殺している。

科学者には妻と子供はいないが、物語のように周囲の者を犠牲にしてしまったら意味がない。

今後のことも考えた見事なまでの対策。そして、半永久的に生きる魅力的な女性の怪物。誰もが驚嘆し、自分を天才と持てはやするであろう。

富と名声で築き上げた人生像を脳内で構築しながら、科学者は女性型フランケンシュタインを覚醒させるレバーを降ろした。

「さあ起きるのだ。そして、我が為に動いて働け」

電撃を受けたかのように立ち上がった女性型フランケンシュタインは、魅惑的な瞳で科学者を見た。

それもそのはず、世界中の女優から選抜した新鮮な死体を怪物の

体としたのだ。魅惑的でないわけがない。

この段階に達するまで、どれほど苦勞したことか。

科学者は熱いものが込み上げてきたのを感じながら、瞼を拭った。
「苦節五十年……ようやく、私の思いが通じた。恋もせず妻も迎えず、先の見えない發明生活も今日で終わりだ」

科学者は真剣な表情になると、女性型フランケンシュタインを見つめた。

「さて、説明しようか。私が君の生みの親だ。君は二度目の人生を得たのだ」

要領を得ていないのか、女性型フランケンシュタインは科学者を見つめたまま動かない。人間並みの知性はあるはずだ。眠っている時の脳波も確認済みである。

更に科学者は続けた。

「驚くのも無理はないな。しかし、安心したまえ。君の人生は私が保証しよう」

科学者は懷に隠してあったものを取り出すと、女性型フランケンシュタインの目の前に突き出した。

「この下着を付けてくれ、そして私と結婚してくれ！　そして夜は二人で……」

そこで科学者の声は途切れた。女性型フランケンシュタインの渾身の一撃をもらったのだ。

なるほど、伴侶を用意したのはいいが、彼女には選ぶ権利があったわけだ。

完璧を追求したのが仇になるとは――

人間並みの知性は必要なかったのではないかと反省しても、覺醒させた今では、手遅れとしか言いようがない。

適中

人間とは不思議なもので示された幸運だとしても、奇跡だと信じてしまう性質らしい。

それを証拠に、ある建物の占い店には、いつも尽きることのない行列があった。

とにかく当たるのだ。占い通りに行動を起こしたら、幸せになったという女性は数え切れない。

噂が噂を呼び、ネットでも話題となり、占い師の名は全国に知られるところとなった。

今日も幸せになりたいと悩みを相談する女性が、占いの館に訪れる。

香で満たされた部屋の中に入った女性の顔を、水晶玉が反射した光が照らした。

「ようこそ、予約されたかたですね。アンケートで確認しました。では、さらに詳しく教えてください」

占い師の言葉を聞いて、女性は語り始めた。

「出会いがないんです。理想の男性はいます。けれど、男運がないというか」

「それは、そういった男性と結ばれる方法を聞きたいということでしょうか。出会いだけを求めているということでしょうか」

「素敵な出会いがあるだけで私は幸せです。けれど、そのためにはどうしたら……」

占い師は水晶に手をかざすと、なにやら唱え始めた。どの国の言語にも当てはまらない、音波のような声だ。

「あなたの未来が見えました。二時間後、運命の人があなたのもとに訪れます。但し、幸せは常に逃げていくもの。つかまなければいけません」

「では、どうすれば」

「このクリスタルを首に掛け、駅前の噴水で待つのです」
クリスタルの価格は五千円。高額というものでもない。

女性はこれで出会いがあるならと言って、クリスタルを購入した。
「素晴らしい出会いと幸せが、あなたのもとに訪れるように」

不安そうな顔で去っていくとするとする女性に、占い師は声をかけた。
「私の占いに嘘はありませんよ。幸せの欠片が見つからなければ、
いつでもクリスタルを返品してください」

占い師の心強い後押しで力を得たのか、女性は首を縦に振ると意志のこもった眼差しで出ていった。

女性を見送った占い師は息を吐くと、電話をかける。そして、電話越しの相手に言った。

「二時間後、噴水の前に頼んだ男性を待たせておいて。目印は首にクリスタルを掛けた女性よ」

電話を切った占い師に、助手が飲み物を持ってくる。

「お疲れさまです。お見合いは順調のようですね」

助手の渡した飲み物を口にする、占い師は笑った。

「誰でも道を示されれば、幸せをつかもうとするものなのよ。この場合は私もお見合い助勢店を営んでいる私の妹も、収入があって幸せね。あの女性の子供が産まれれば少子化も防げて尚幸せ。後は、あなたも私の跡を継いで独立できると……」

「さらに幸せですね」

占い師は話が終わると、次の客を招き入れた。

用法用量

あるコンクリート製のホテルの一室。そのベッドの上で男と女が向かい合っていた。

両者の手元には、液体の入った薬瓶がある。互いに真剣な表情であった。

「とうとう、この時がきたな」

男は薬瓶の蓋を慎重に開けながら女に語る。女も男に倣うように薬瓶の蓋を開けた。

時刻は午後十一時を示している。明日は休日、思い切った行動を起こすなら、これほど条件のいい日はない。

「私、怖い……」

「怖いのはわかるさ。だけど君一人じゃない。俺がいる」

怯える女の肩に手を置いた男は、気を落ち着かせるように深呼吸をした。

「こういったのは相手が飲むのを見てからよりも、一緒に飲んでしまった方がいい。そうすれば、迷うこともないし、お互い一緒の時間を味わうことが出来る」

男の言葉に女は首を縦に動かした。この日のために、手に入れにくい薬と誰にも邪魔されない場所を確保したのだ。

お互いに呼吸を整えてから、合図とともに同時に液剤を飲む。

独特の味に苦戦しながらも、二人は液剤を同時に飲み切った。

「どうだ、何か感じるか？」

男の問いに女は首を横に振って答える。効果が表れるのは約十分後と説明にはあった。

時間が経過するのを待とうと、男がタバコを取り出して火を点けようとする。

瞬間、男の胸が徐々に膨れて巨大化していった。ただ女は呆然と、目の前の男の胸囲が自分以上になるのを、見つめ続けていた。

十分後には胸の膨らみが止まった。男に変化があったのに対して、女に変化はない。

「ねえ……もしかして、そのもしかしてだけど……」

震えた声で女が聞く。見つめ合う二人に言葉はない。沈黙だ。

カラになった薬瓶を確認した男が、全身を震わせながら叫んだ。

「くそっ、男用と女用を逆に飲んだんだ。この日のために準備したのに」

「どうするのよ！ と、いうことは、一生そのままなの？」

「いや、元に戻す薬も用心のために買っている」

男はカバンから薬瓶を出すと、今度は説明文を確認してから液剤を飲んだ。

効果が表れるのは十分後、巨大化した男の胸が今度は萎んでいく。ようやく前の自分を取り戻した男は、安堵の息を吐いた直後に、がつくりと肩を落とした。

「今日のために購入したのに……もったいないことをしたな」

すると、ため息をつきながら言う男の顔色を窺うように、女が覗きこんだ。

「ねえ、だったら私も元に戻す薬を飲んだほうがいいんじゃないの？」

「……元に戻す薬？ どこを元に戻すんだ？」

男の問いには女が答えるのではなく、

『商品名…大きくなる薬』

用法用量を守って正しくお使いください。素敵な夜を楽しみたいという男女に。男性用と女性用がありますのでお気を付けください』と、書かれたカラの薬瓶が代わりに答えていた。

怪獣

地球にはヒーローが存在する。

そしてヒーローは地球の平和を守るため、大暴れする巨大怪獣に戦いを挑むのだ。

今週も怪獣が現れた。突如、街中で大暴れを始めた怪獣を前に、人々は成す術もなく逃げ惑うしかない。

破壊の限りを尽くした怪獣は、今度は都市部に狙いを定めると、足元にある建物に構うことなく闊歩し始めた。

まるでドミノ倒しのように倒れていく高層住宅、踏み潰される高級車。電線を体に巻き付けながら進む怪獣は、紫電が飛び散っても痛みを感じない様子だ。

その時、子供の泣き叫ぶ声がした。親とはぐれて、逃げ場を失ってしまったのだ。持ち上げられた怪獣の巨大な足の影が、子供を覆い尽くす。

まさに絶体絶命である。

その瞬間、ヒーローが上空から姿を現して着地。怪獣に攻撃を加えた。

「おおっ、ヒーローが来てくれたぞ。いいぞ、やっちゃまえ！」

ヒーローの雄姿を見た人々から、歓喜の声が上がる。皆がヒーローの勝利を信じているのだ。

しかし、怪獣も黙ってはいない。すぐに立ち上がって反撃に転じていた。

今日の怪獣もなかなかの強敵だが、ヒーローは毎週のように戦い続けてきているのだ。それに人々の応援が背中を押してくれている。決着はご想像通りのものだった。制限時間三分前に決着をつける

と、ヒーローは最後の攻撃態勢に入った。

必殺○ペシウ○光線だ！
その時だった。突如、大きな影がヒーローを覆い尽くしたかと思

うと、怪獣が二体、降下してきた。倒した怪獣よりも一回りは大きい二体だ。

そして倒れていた怪獣が、顔を上げて叫んだ。

「父ちゃん、母ちゃん！」

叫びが終わるよりも早く、ヒーローを睨んだ母親怪獣が持っている手提げバッグを振り上げる。

「うちの子に何するのよ！」

強烈な一撃を受けたヒーローは、轟音を立てながら倒れ伏した。

人々は倒れたヒーローの姿に何も言えないまま硬直するしかない。

そんなヒーローと人々の反応に構わず、怪獣の母親が言い放った。

「地球が子供のよい情操教育の場と聞いてきたけど、それは大きな間違いだったわ。うちの子の教育方針は自由と破壊ですよ」

続けて怪獣の父親も口を開いた。

「そうだな。お前のような奴に、我が子は預けられん。うちの子は違う星で自由に育てることにしよう」

言って怪獣親子は宇宙船を呼び出すと、体を縮小化させて乗り込んで彼方に消えた。

見事に怪獣を追い返したヒーローに、ちょっとした拍手が送られる。

――が、今日だけはヒーローが受けたダメージは大きかった。

「何で、俺が悪者みたいになってるの」

民衆の「ありがとう」という慰めに近い言葉が、泣きながら空を飛んだヒーローの背中に優しく掛けられていた。

かくして、地球の平和は守られた。

来週のヒーローは怪獣をどう打ち倒すのか――

時代は変わり続けているので、今後の展開は変わっていくのかもしれない。

祝砲

ある川原で一大イベントが開催されようとしていた。開催を待ちわびていた者の人数は、陽が落ちると同時に一気に膨れ上がっていく。

普段は人通りのない川沿いが、人で埋め尽くされた。

夏の一大イベントでもある大花火大会。

誰もが一番よく見える特等席を確保しようと、場所取りのゴザを敷いている。

そんな騒ぎの中に、ある男女がいた。

出会って二年の二人は、一年目で婚約をすると、その一か月後に結婚した。

今日は妻の誘いで男は来た。人ゴミが嫌いな男は怒鳴り声や化粧臭、更に既に出来上がっている酔っ払いの酒臭さに気分が悪くなりかけていた。

そんな時、妻が男の腕を引っ張って前に連れ出す。ちょっとした空間に跳び込んだ男は、安堵の息をついた。

「良かった。ここなら花火もよく見えるわね」

妻に花火大会に誘われたのは昨日だ。あまりにも突然のことに男は驚いた。

それでも愛している妻のためだ。仕事で疲れ切った体の貴重な休養時間を潰して、妻と一緒にここに来た。

不意に妻が真剣な表情になった。そして、男の腕に抱きつく。

「あのさ、一年前のこと覚えてる？」

一年前のことと聞かれて、男は首を傾げた。その動作に妻が男の肩を思いきり叩く。

「いって！ 急になんだよ……」

「去年もこの大花火大会に来たじゃない。何を言ったか覚えてる？」

「あ、その話か。確か……」

男が言い掛けた時、大花火大会が始まり、爆発音とともに夜空に紅い菊花が生まれた。

客から歓声上がり、次々と川に浮かぶ船上から大玉が打ち上げられる。

声は花火と観客の声でかき消され、大きな声で話すのを余儀なくされた。

「結婚してくれって言った！」

花火の爆発音が途切れた瞬間、男の大きな声が周囲に響いた。

周りの観客が驚いた様子で男に視線を向ける。

男は思い出した。そういえば――去年も同じ失敗をしたっけ。

「フフ……なんとなく、あの日に戻ったみたいだね。けど今日は少し違うこともあるけど」

違うこと？ と、男が聞き返すと同時に、また花火が打ち上げられ声が遮られた。

妻が口を開きながら何かを訴え続ける。花火の爆発音が途切れた瞬間、今度は妻の声が響いた。

「赤ちゃんが出来たの！」

妻が花火大会に、無理に誘ってきた真意を知って男は笑った。

「来年は最高の幸せを、隣にまたここに来ような」

まるで祝砲のように上がった一筋の光が爆発し、夜空に大輪を咲かせていた。

中身

通勤時に妻から渡されるゴミ袋。燃えるゴミの日、燃えないゴミの日、今では近所のどの旦那よりも知っているという自信がある。ゴミ捨て――それが夫の日課になっていた。

新婚二年目で念願の子宝に恵まれた。生後五か月の娘は夜泣きも激しいが、赤ん坊は泣くのが仕事なのだからとあやす。

そんなある日、妻が夫に向かって聞いた。

「ねえ、あなた。大きな紙袋持ってない？」

「紙袋？ 何に使うんだ？」

「見られたくないゴミもあるでしょ。お隣の猫もゴミを漁るし、黒い袋だと収集の人も持って行ってくれないのよ」

話を聞くと市の決まりでそうなっているらしい。夫は持っていた紙袋を妻に渡した。

翌日、夫は出勤時の恒例となったゴミ袋を渡された。しかし、その日は燃えないゴミの日なので、紙袋は入っていなかった。

いつも通り、通勤ついでに捨てに行く。すると、隣の奥さんの姿が見えた。

「クロちゃん！」

クロとは隣が飼っている猫の名前だ。朝は玄関先で餌を食べているが、今日はいないようだ。

ゴミを漁る猫を放しているからだ。夫は可哀そうとは思わずに、会社に足を向けた。

その日は残業となった。自宅に着いたのは壁掛け時計の時刻が二ケタになった頃だった。疲れきっていても、愛らしい我が子の寝顔を見ただけで疲れは吹き飛ぶ。

しかし、娘がいるはずのベッドを覗くと姿がなかった。

「あれ、どこ行ったんだ？」

食事の用意をしていた妻に聞くと、包丁を手にしながら答えた。

「いつも夜泣きで眠れないでしょ。だから、お母さんに預けたのよ」
あるはずの声がない静寂空間――

お蔭で久ぶりに熟睡できた。夫は義母に感謝した。

寝覚めの気分も最高で、いつも睡魔で喉を通らない朝食も食べることが出来た。

が、出掛ける時、恒例のゴミ袋を手渡されて、夫は息を呑んだ。大きく膨れた紙袋があった。しかも入れてある指定のゴミ袋はいつもの大袋ではなく特大袋だ。

ずしりと片手にくる重量は、程度の水分を含んだ何かに違いない。持たされた何かを持って捨てに行く。すると、

「クロちゃん！」

また隣の奥さんが声を上げていた。

不意に思い出された「見られたくないゴミもあるでしょ」。妻は何を入れたのか。

背筋に悪寒が走る。紙袋に手を掛ける。意を決して開くと、異臭が鼻をついた。

あり得ない。妻が、そんな、まさか――

中身を見る。その途端、水分を吸収する大量の紙オムツが見えた。妻が見られたくないと言ったモノを見てしまった。

娘の粗相……見てしまって申し訳ない。大量の水分を含んだものだ。重くて当然だ。

しかも使い古した自分の下着と妻の下着も入っている。

仕事を終えて帰った時、娘を連れてきた義母の姿が見えた。

聞くと、隣の猫も帰ってきたらしい。

変に詮索してしまった自分に疲れて、夫はただ息をつくしかなかった。

間違い（前書き）

今回は間違い探しにしてみました。

『 』内の言葉に注目してお読みください。
間違いは三つ。

ヒントは『数学者なのに』です。

間違い

ある研究室で代表者の男がレポートを纏めようとしていた。内容は部下たちとともにようやく辿りついた、数学難問の解答である。こういった未解決難問には、高額の懸賞金が付いていたりする。魅力的な上に、自分たちの頭脳の高さを証明できるチャンスだ。部下たちが完成させた解答資料を前に、自分の想いも加えて書き綴っていく。

ところが代表者は順調に動いていた手をとめた。部下たちのレポートを見て、呆れてしまったのだ。

「計算式は完璧なのに、説明部に間違いがあるじゃないか」
代表者は腹が立って赤ペンで修正した。これで部下は反省するだろう。

しかし、修正すると全てが気になってくる。文章の流れも覚束おぼつかなかったり、お世辞でも納得できるものだとは言えない。

「こういったことは再教育しないと……」

『パーセントでも万が一ってことがあるんだ』

注意文として、思いついた言葉をそのまま書きこむ。

他の部下たちのレポートにも、気に入らない点があった。

数学者であっても、大切なレポートだ。間違いがあるのは許されない。

代表者は苛立ちを感じ、思ったことを感情的に書き殴った。

『ゼロからでも、数百倍の恥になることもあるんだ』

『段階を怠るな。ナナからシチ、ハチ、キュウは基本だろ』

気に入らない部分は赤ペンで修正。部下の考えは根本的に間違っている、思ったままに注意文を書く。

翌日、代表者の男は、部下たちに最高の教授をしてやったと満足しながら、レポートを一から書き直すように言って返した。

渋々、席に戻ってレポートを書き直す部下を見て、代表者は自分

の権力を認識する。

これで、俺の未解決難問解答資料は、全ての者に理解されるはずだ。

代表者は自分を誇らしく思いながら研究室を後にした。風を切るように颯爽と廊下を歩いた。

代表者が出ていった研究室内で、部下たちは返されたレポートの見せ合いをしていた。

お互いの間違いを確認することと、それと――

「間違いをしているのは誰だよ。けれど……伝えるべきか悩むな」

「ああ、このことは黙っておくか」

部下たちは、未解決難問のレポートを纏めながら息をつく。

そして、数学者にはありえない三つの間違いには、赤ペンで修正線が引かれていた。

間違い（後書き）

代表者の間違い

（答えは下です←）

『一パーセントでも万が一』↓一パーセントは百分の一。万が一にはなりません。

『ゼロの確率でも数百倍』↓ゼロは何倍にしてもゼロのまま。

『ナナからシチ、ハチ、キュウ』↓7が二つ並んでいます。

訳あり物件

ある高級住宅地に格安の豪邸があった。新築当時は三億だった家だが、現在では五千万となっている。

外観、内装を見ても文句なしの破格の値段。見学した誰もがこの金額でいいのですかと問う。そして、何故、この価格なのですかとも聞く。

その度に不動産業者は、深い息を吐いてから答えるのだ。

「実は、訳あり物件なのです」と。

夜な夜な寝室に響くラップ音と女のすすり泣く声。

幽霊を信じていない者まで見たと言うのだから、幻覚ではないのだろう。決まった時間、丑の刻に金縛りにあったという話もある。

何故そこが訳あり物件となってしまったのか。業者は理由を知っていた。

豪邸には一人の女性が住んでいた。コツコツと貯金をし、その貯金からビジネスを広げて億万長者となった。更に女性には他人が羨む美貌もあった。

全てを得たと思われた女性。しかし、それとは裏腹に女性には男性との出会いがなかった。金と美貌、その二点を得るために女性は友や人を思いやる気持ちを捨てていたのだ。

孤独に苛んだ女性は自ら自宅で命を絶った。それ以来、女性の霊が成仏せずに住み着いてしまったのだ。

物件としては最上級、それでも訳ありなので売れない。業者は頭を悩ませた。

「仕方ない。違う不動産に手放すか。こんな問題物件を抱えていたら赤字のままだ」

高額物件だからこそ、手にしていると税金がかかってくる。

そのため訳あり物件は、違う不動産業者に託された。すぐに手を出す者はいないだろう。そう考えていたが、意外にも訳あり物件は

数週間後に売れたという情報が入った。

何故、売れたのだろうか。不動産業者は首を傾げた。

もしかしたら、訳あり物件だということを隠して売却したのかもしれない。しかし、情報を聞くと、訳あり物件として売ったという話だった。

理由が聞きたくて、不動産業者は託した相手に電話を掛けた。

一体、幾らで売ったのか。どうやって売ったのか。

出た相手はこちらが驚く答えを告げた。

「え、売った方法ですか？ 競売ですよ。思った以上の値がつきましてね。お宅さまには感謝しています」

「思った以上の値？ 一体、どうやって売ったのですか」

売れた理由を聞かないわけにはいかない。恥を承知で聞くと相手はさらりと答えた。

「知らなかったんですか。あの豪邸の住人、元女優だったんですよ。幽霊になって、夜な夜なすすり泣きながら情熱的に抱きついてくると宣伝したら、成り金男性が高額で落札してくれたのです。うちの社員の体験済みレポートが特に効いたようですね」

保険天国。保障が服を着て歩く。（前書き）

沢木香穂里先生のお題で書かせていただきました。

保険天国。保障が服を着て歩く。

工業地帯に一際大きな工場があった。危険作業や重労働が多いこの場所では、必ずといっていいほどある業界の者が姿を見せる。

その日も代表者と話がしたいと、一人の女性が受付に声を掛けてきた。

内線で報告を受けた社長は、現場を離れて受付に急いだ。相手が誰なのか見当はついている。半ば強制的に契約を結ばせようとする、ノルマ重視の保険勧誘員だ。

「私は〇〇生命保険の者です。今日は保険というものの大切さを説明したくて来ました」

ところが、受付に着いた途端、最高級の笑顔を向けられた社長は硬直してしまった。

いつもの勧誘員ではなかった。女性は丁寧にお辞儀をしてから、パンフレットを広げる。

「皆さん危険で体力を使う作業をされているかと思ひまして。私も保険に助けられた経験がありますので、説明させていただきたいのです」

今までの勧誘員とは雰囲気が違う。社長は快く女性を招き入れ、社員に保険について説明してもらうことにした。

しかし、この女性。勧誘員としては未熟だった。

営業にはノルマというものがある。保険勧誘員でいうのなら、契約してくれる人数だ。

女性は優しすぎるため、無理な勧誘をしない人物だった。それでも保険を勧めたいという情熱は感じられる。

さすがに社長は、いつも必死に保険を説明しに来る女性を可哀そうに感じて話し掛けた。

「なあ君、加入したいから、詳しく説明してくれないか。私は妻もいなければ子もない。それなので個人契約をしたいのだが」

そして、社長が契約すると他の社員も続けて契約をして、女性の営業成績は少しずつ上がっていった。もともと優しさや熱意があるのだ。話して、信頼しない者はいないだろう。

客が増えれば、当然、話す時間は減る。

社長は先日まで仲良く話していた女性が、少し離れてしまったように寂しく感じた。同時に女性の仕事が増えたのはいいいことと自分に言い聞かせた。

そう感じていた矢先、突然の頭痛に襲われて意識を失った。

自分には妻も子もない。心配してくれる者など誰一人いないと考えていた社長だったが、目を開けた時に一人の女性が隣にいた。あの保険勧誘員だった。

「社長さんが倒れたと聞いて慌てて来たんです。私の父も同じ、くも膜下出血で倒れたことがあるので……よかった。無事で」

女性が保険を情熱的に勧めてきた理由がわかった。くも膜下出血は再発しやすいからだ。しかも女性は自分を父親が倒れた時のように心配してくれている。

社長が退院してからも女性との付き合いは続いた。そして更に仲は深く進展していった。

今では社長は個人契約ではない保険に入っている。心配していた後遺症もない。街に出る時は彼女も必ず一緒だ。

勧誘が苦手な彼女は保険勧誘員を辞めた。代わりにどんな保険よりも頼もしい事務社員として、共に人生を歩くパートナーとなってくれている。

プロローグ

ある山に、野犬の群れと日本猿の群れが住んでいた。

お互いが自分たちのテリトリーを主張し、尚且つ実力は拮抗状態。争うと必ず負傷者が出て、勝敗は決まらなかった。

これでは損はあっても得がない。

両者のリーダーはようやく争いは無駄と知り、顔を合わせて話し合う時間をもった。

はじめに日本猿のリーダーが、野犬のリーダーに案を出した。

「このまま争うだけでは互いに飢え死にするだけだ。ここは互いに助け合おうじゃないか」

日本猿のリーダーの案に、野犬のリーダーが答えた。

「助け合うのはいいが、山に食料が不足していることに変わりはない。我々だけではどうにもならないぞ」

互いの群れが食料を取り合ってきたために、獲物も山の幸も見つけることが困難になり始めていたのだ。

二匹は事態を重く見た。このままでは全滅してしまう。自分の群れも相手の群れも――

「もう、他の者に助けを求めるしかない」

二匹の答えが一致した時、頭の上から羽ばたきが聞こえた。

「お、奇妙な取り合わせだね。君たち、人間がいう犬猿の仲とかいうやつじゃないの」

二匹は突然現れた、赤い顔の鳥を睨みつける。

「今、腹が減って苛立っているんだ。喧嘩をうるつもりなら食ってしまうぞ」

「いや待て、翼がある奴なら、俺たちよりいろいろなことを知っているに違いない。食われたくなければ、何かうまい話を教えてくれないか」

攻撃的な野犬と問い掛けてきた日本猿を相手に、鳥は喉を鳴らし

ながら答えた。

「うまい話なら、人間の仲間になるといいよ。ちよいとした噂を聞いてね。僕に付いてきてくれるなら、君たちの群れのことも何とかなと思うよ」

鳥の話に野犬と日本猿は顔を見合わせた。人間の仲間になるとい
うのは、ちょっと考え難いが、美味しい物にありつけて、しかも群
れも何とかなるというのなら申し分ない。

「うむ……いい話だな。では、その話にのるか。ところで、うまい
話というのは？」

同意した野犬と日本猿は、うまい話と聞いて舌舐めずりをする。

そんな二匹に鳥は言った。

「何でも有志を募っているみたいなんだよね。悪い奴を退治すると
か言ってさ。美味しそうなキビ団子を持っていたみたいだから、仲
間にしてもらおう代わりに貰えるんじゃないかな。君たちケーン猿の
仲が実は良いってことも、人間たちに語り続けられると思うよ」

デニッシュパンにソフトクリームをのせてみた。(前書き)

沢木香穂里先生のお題で書きました。

デニッシュパンにソフトクリームをのせてみた。

都心の一角に赤レンガの壁に木造りの看板がかけられた、個人経営のパン屋があった。

経営者の店長兼調理人は独身男性で、ある店のデニッシュパンを食べた瞬間、その美味しさに感動して店を建ててしまったという経歴の持ち主だ。

手作りに拘ったパン屋の朝は早い。仕込みをしなくてはいけないので、暗い時間でも調理場に立たなければならぬ。

いつものように自慢のイースト菌に朝の挨拶をした男性は、眠い目を擦りながら仕込み作業を始めた。鳥も起きていないような時間だ。今日もお客さまが喜ぶ最高のものをと自分を奮い立たせる。

その時、窓に微かな光が当たっているのに男性は気づいた。

月光や朝日ではない。それが電灯の明かりと気づいた男性は窓を開けた。

目の前にあったのは壁と窓。灯りの源は新装開店したばかりの、隣のソフトクリーム店だった。

曇りガラスに映る人影が忙しく動く姿に、男性はそれがソフトクリーム店の店長の影だと気づいた。

ソフトクリーム店の店長は二十代くらいの女性。開店した当初から彼女のことは気になっていて、若いのに個人経営で頑張るなど感心していた。

不意に窓の向こうから声が聞こえた。

「タマゴが切れちゃった。あいつ使ったなー。ああ、もう！ 今の時間、お店開いてるかな」

男性はじっとしていることが出来ずに、目の前の窓を叩いた。二度、三度――

向こうが静かになったかと思うと窓が開く。今まで遠くで見っていた店長の顔が目の前に現れた。

「この近くのお店は十時開店だから、まだ開いていませんよ。よかったら、これを使いませんか」

全国を回って見つけた自慢のタマゴを彼女に差し出す。

「え、いいんですか？ このタマゴ、高そうですね……」

「この際、値段は気にしないでおきましょう。自慢のタマゴです。逆に使ってくれたほうが私は嬉しいんですよ」

頭を下げた彼女は「ありがとうございます」と言って、窓を閉めて奥に消えた。

手際良く材料を掻き回す音が聞こえる。男性も負けじと仕込み作業を始めた。

そんなことがあった次の日、接客をする男性の前に女性が現れた。客としてきてくれたのだ。いつもとは違う普段着の彼女。男性は緊張したが、それは一瞬だった。彼女の隣に若い男性がいたのだ。

窓の向こうで言っていた「あいつ」がそうだったのだろう。独身男の淡い恋はあっけなく終わった。

相手は何も知らない。独身男の勝手な恋愛感情が生み出した、誰も認知しない失恋。

トレーの上を選んだパンをのせて彼女が来る。目が合うと笑顔を見せてくれた。

「タマゴ、ありがとうございます。いつもより美味しいって、お客様に大好評でした」

「それは良かった」

「このお店のデニッシュパンの人気の秘密がわかりました」

彼女に言われて男性はハツとした。思いついた途端、自分はどことんパンをつくるのが好きなのだなと感じた。

「面白いことを思いつきました。話を聞いてくれませんか」

それは多分、未練がましい独身男性の懇願。それでも彼女は、「面白そうです」と、笑顔で答えてくれた。

同じタマゴという材料でつくられたデニッシュパンとソフトクリ

ーム。きつと美味しいに違いない。

互いがつくることが好きで生まれた合作。

恋は成就しなくても、せめて彼女と同じ美味しい物をつくるという想いで繋がるが出来たら――

男性の狙いは大当たりし、翌日から都心の一角に行列のできる店が二件並んだ。

今では新商品デニッシュソフトクリームが、二つの店の目玉商品となっている。

中年男性の淡い恋心は、きつと女性には伝わらないまま。それでも男性は女性の笑顔を見るだけで幸せな気持ちになれる。

そう、今はこれでいい。それだけで満足なのだから――

今は目の前にいるお客さまのために笑顔を与える、二人の店長が都心の一角に存在している。

視点

舞台は全国駅伝大会。寒風が強くなってきた山道の登り坂で、男たちは競い合っていた。

一年間の練習の成果を見せようと、鍛え上げた体を武器に争いが繰り広げられる。前走車に乗って指示する監督の声で、選手は更に奮い立つ。

白い息を吐きながら山道を登っていた彼は、目の前にいる男たちを標的に捉えていた。ここまでで八人抜きをしている。区間新記録間違ったというスピードだ。

目の前にいる相手が見えても、彼は焦らずに自分のペースを守り続けていた。頂点に居続けている彼にとって、相手は相手であってライバルは自分だけなのだ。

あつという間に距離を詰めて一人抜き去る。更にもう一人。

彼は自分のペースを確認するために時計を見た。残り距離は一キロ。体力にはまだ余裕がある。これならまだ行けると彼は判断し、更に速度を上げた。

区間新記録は間違いない。それでも彼は貪欲に記録をのぼすことを選んだ。

目の前に優勝候補とされたチームの選手が見えた。その相手を見て、彼は様子がおかしいとすぐに分かった。ふらついていたのだ。

ぶつからないよう距離を取って抜く。ほぼ同時にその選手が、路肩に倒れ込んだ。

それでも今は競技中だ。彼は倒れた選手には目もくれずに走る。通り抜ける度に湧き起こる応援客の歓声。その歓声を背に彼は山に登っていった。

倒れ込んだ選手は、自分を抜き去っていったライバルの背中を睨み続けていた。

聞こえる応援客の声は、「頑張れ」という懇願にも似た言葉だ。彼は自由が利かなくなりはじめた足を思いきり叩くと立ち上がった。タスキは途切れさせない。ゴールまではあと一キロ。やれるだけやってやる。

母が渡してくれたお守りを取り出す。中には弟たちが書いてくれた応援メッセージがあった。

同じ優勝を目指す友のため、自分を信頼してくれた指導者のために、そして誰よりも支えてくれた家族のために彼は走る。

ここまで彼が来た道には、凡人には分かり得ないほどの辛い経験があった。

落ちこんでいた時期に優秀な指導者と出会ったのだ。それが前の監督だった。

監督のお蔭で走ることが彼の生き甲斐となった。走ることをやめてしまうと彼の存在価値がなくなる。それほど練習に打ち込み、監督に恩を返そうと必死になった。

それなのに――

作者が視点を間違えたことによって、ドラマ性のある彼の物語は詳細に書かれず、ここで幕を閉じようとしている。

あの、いろいろと御免なさい。この作品、改編したほうがいいでしょうか？

「文字数制限あるなら、はじめからこっち視点で書けよ！ アホ作者！」

そして、叫んだ彼が今後のマラソン界の歴史に名を刻む有名選手になるということは、作者と読者さまが知る予告ということでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8627n/>

短編集　～一息～

2011年11月14日03時26分発行